

雪達磨をしつらひ○雪の日は天地静かに○寒さ入江に釣するさま、
宛然の畫○冬の江に釣する翁○江上の山は水晶の如く○雪曇りして
夕日に影なく○晚鴉の點々として歸る○疎鐘の響きも牙をて聞ぬ○
終日釣して何をか獲たる○雪空の日暮を歸らんとはせで○音もなら
降り出でし冬の雪○冬の山家は更に淋しく○落葉深う門を埋め○落
葉に霜の迹見ぬ○北山おろし身をさく程に寒く○冬に入りては訪ふ
人だになく○只山茶花の淋しう咲き初め○南天の實のみ赤う○木の
葉飛び狂ふ木枯し○窓に落葉の時雨寒うひびき○何事にも後れがち
の山里、雪のみは都よりも早う降り○寒燈を友としての夜學、言ひ
知らぬ興味を覺ぬ○板庇に霰のたばしる音寒うさこぬ○雨は霰々は

雪となりゆく寒けさ○猿の叫び聲哀れに○梟の鳴き聲凄く○硯の海
にも氷鎖ぢ○分けて北國は寒く○筆の鋒先も凍りて書かれず○樵夫
の通ふ路も雪に埋められ○今朝は松さへ白う、さながら老ひゆきた
らる白髪のごと○雪の曙の景色は都にては見もやられず○城下ま
で六里と云ふなる山里○冬より春にかけて雪に都路隔てられ○驛使
の傳ふ便に○都の事どもは其日くの新聞に問ひ○淋しき冬の山家
も、流石に家庭温かに○暮れゆく年の名殘○光陰の過ぎゆく矢より
も疾く○白駒の隙を馳するが如く○春よりの怠り今更のやうに打驚
かれぬ○何事も進まぬに、年のみは早く暮れゆき○惜みても過ぎし
光陰は返らず○過ぐることもなくいつしか年は過ぎゆきつ○明日は明

日はと思ふうち○數ふれば餘す所僅かに十日餘○こしかたを考れば
 ○光陰流水の如く、人の怠るを待たず○さま／＼の物思ひなきにあ
 らず○除夜の鐘は百八○行き暮れし旅の空には○今夜と云ふ今夜は
 今年の終りにて○今年も已に殘燈と盡さんとす○春待ち前に打ち笑
 ひ盆梅○げに光陰に關守なく○明日は曆も改まりて、人も新に志を
 立て○友より贈られし早梅を見るにつけても、川世の花をつくる事
 の避さ身耻かしく○錦着て故郷に歸らん日も○家々には迎年の用意
 どり／＼忙しく○流石に子供心には明日の來るを待ち○思へば惜し
 き年の暮れよ○はかなく年は暮れゆきて○明日は今年の吾ならずと
 悲しき中にも、又うれしき事の心にわさみち○來れ新年。

○冬季雜語

み冬立つ頃としなれば、人目も草もかれゆきて、たま／＼音ならぬ
 のは、朝風に散る木の葉ならでは小夜ふけて、なく猿の聲、さては
 峰の松風の音のみなるこそ、げに物淋しさ一入まさりけれ。
 あはれ、朝に夕にかしきは、山里の雪景色にこそあれ、あはれ、
 夕に朝にかしきは、山里の雪景色にこそあれ。
 入相の鐘も殊に澄みて聞えて、さし上る月の光りも積れる雪に磨か
 れて清し。

月は雪に、雪は月に、移らうつろひて、氷より冷かなり。

見所なき冬枯の梢も、また常磐の松も、ひとつなみに、六の花さ
出で、春の盛りにもまさりぬる景色と、なれるぞ目覺し。

白妙の雪降り積りて、いぶせき山かつの庵も玉の臺となり、見わた
す限り、銀の世界どかはりぬ。

朝は置く霜白くして寒かりしが、日の高くなるまゝに暖かになりけ
れば、詩集懐にして、柴折戸くゞりぬけ野に出づ。

日の出を見ばやど、柴折戸くゞりぬけ枯草に置く霜ふみわけて、小
川の丸木橋にかゝれば、はや薄氷結びて、落葉はどぞこめられぬ。

六花紛々として鷺毛の飛ぶかの如く、忽ち世は玉となり終へぬ。
さても美しさは枯木を飾れる雪に、日さらくと照り添ひ、樹々ぞ

皆不香の花をつけ、賑かなる天地となる。

雪は全くやみて、雪達摩を作れる小兒の赤き手を、口にわて、暖む
るもをかし。

雪もつ黒雲低うおはひて天に星の影なく、地たゞ黒うして燈火一つ
見ぬす。まして、木枯ふきすすさび小笹のそよぎ凄し。

雪をも凌ぐ大銀杏、吹く木枯に落葉して我山里に冬ぞ來れり。
深雪にどざされし翁が小屋より、炭やく烟はいとゆるやかに上れり

よべ降りし雪いたく積りて、千歳變らぬ緑の松も、今朝は眞白の雪
にて飾られぬ。

霜しるき朝、踏めば珊々と音する田圃道、逞しき獵犬ひき連れ。

池は凍りて松の影を映さず、中にはさらめく寒月一痕。

火桶抱へて寒燈の下に、書繕きて讀みゆく程に、窓にさわぐ夜の木
枯、一群竹の怪しや音に雪や降りぬらんと、窓の戸おし開けば、寒
月氷の如く冴えて、さても淋しき冬の色かな。

冬枯の庭に玉走る露の音絶へ。

冷たき霜に秋の七草は、ことごとく枯れはて、冬どはなれり。

昨日の雪、今朝の日和にはや解けそめて、枯木の枝より枝に傳はり
て落つる雪つめたし。

黄金の波を打ちよせし稻田の末も刈りつくされて、見渡すあたり只
さみしう、残されたる枯穂も地に折れ、朝ななくに置く霜白う。

三更の鐘の音、遠きみ寺に響いて夜はいたくも更けぬ。

遙かに聞ゆる濱千鳥の三聲四聲、あはれ汝も、蘆の入江に吹く風の
淋しさに、友を呼ぶか。

夜半の寒さの身にしてみても、夢おどろき覺むれば、殘燈消ぬなどし
て影暗く、静けき三更の空に降るは、雪か玉か。

昨日より續さし雪は今尙やまず、書齋の窓も雪もて埋れんとす。
寒鴉枯木に鳴き、凍雀軒に叫ぶ。

清きは雪なり、奇しきは雪なり。一夜にして塵の世を埋め、頃刻に
して枯木に花を咲かす。

鴉一羽、黒すみたる彼方の空より聲をも立てて、何處ともなく飛び

ゆけば、そが羽風とも思はるゝ、いとも微けき寒風の水面掠めて、
吾が足下の枯葉ゆすりぬ。

それよ行くものは、追ふべくもあらざれば、過ぎつるは夢と見て、
此いまはしき年を送らん。

折から枯草に消ゆる夜寒の風、そよ〜として水の面渡るに、思は
ずも袖かさ合せぬ。

庭の泉水は鏡の如く淺く澄みて、二つ三つ浮びし落葉の裏に、小さ
き金魚の斜に潜むもいと面白く、落葉を除くれば忽ち尾を揺りぬ。

里の子は雪合戦に、雪達磨に寒さをも厭はず、戯れ遊ぶとまも、
又なく壯快ならずや。

下駄の音高く牙ゆる寒月の、雪の光を浴びたる夜こそ。

窓の呉竹の葉末に宿れる白露、けさの寒さに凍りて、水晶の玉をつ
けたらん如く、風さど吹くたびに、玉と玉と、葉と葉とすれ合ふお
ど、さや〜と聞ゆ。

庭の山茶花數多く咲きそめ、今何處よりか目白來て鳴く。

すみ渡れる大空には、はや星數多さらめき初めて、光りつめたし、
森も林も野も畑も、家も川も皆一面の銀世界となりて、枯木は花の
如し。

畑の寒菊、寒さを恐れずして、雪中には、笑める、いと優し。
秋去り冬來りて山里に、一入の淋しさをましぬ、梢の木葉は絶えず

吹く木枯に散りはて、今は一片の秋の影だになし。
 烈しき山風は雪を送りて、昨日迄は遠山にのみ見たる白沙の夜は、
 今日迄は庭なる小山にまで降りり。
 明けゆくまゝに空晴れ渡りて、また元の色となり、旭日かけ暈々た
 る銀世界に映じ、清きは益々清く、白さは愈々白し。
 藪垣に綿なと掛け散したるやうなる、或は檜の生垣に綴られたるが
 揺々と動けども、仲々に落ちやらぬなとどりくりに興あり。
 谷川の雪解の流れ、にはかに春のけはひ催し。
 冬の日は何處も短さに、まして嶺より明けて山に暮れゆく山里は、
 殊に短きやうに覺えて、そぞろ哀れを催しぬ。

作例

○伏家雪景 白雪

人目も草もといひけん如く、冬深き山里は、只さへ景色うら枯れて
 いとゞ物さびしきを、日頃打續きて、降りみ降らずみ時雨るれば、
 落葉の外は音づるものもなく、終日ただ閉ぢこもりのみ居て、明し
 暮すに、ぬびしさ限りなければ、み雪白う降りつもりて、晴れ行く
 曙の眺めは、都大路さへいどをかしきに、況してかゝる山里こそ
 こよなうめでたかりけれ。

夜半の程は、さうくしう吹荒みし木枯も、更行くまゝに、漸う静

まりたれど、閨の隙もる夜風、いみじう河を渡りて、折々軒の小笹にさらりと音したるは、いと怪しければ、つとめては、朝戸推し開きて見出すに、思ひがけなく、雪いと白う降りつもりたるも眺めをかし。

斯ばかりの雪に、繩朽ちたればにや庭の柴垣、打崩れたるは、いと口惜しけれど、前なる竹は、下朽して、谷の隈まではるくと、見はるかざるは、亦はからずなり。

打見渡す向の岡は、松の葉白う積りて、緑の色まばらに、重なる山々は昨日の状に似もやらず、今朝は只一色となり變りて、皆とりどりに、白き衣打着たらん様なるこそ、中々にをかしけれ。一すぢ帯

の如くに、麓流る、谷川は、瀬早ければにや、今朝も猶氷氷らず、打渡す丸木橋より、峰の林の奥かけて、踏み分け上りたる足跡は、かゝる晨にも、里人の炭焼に行きしにや。

見振くる限りしるくと、打續く田面の末に、一村立並ぶ賤が家々の、錦をやかづきたるとは紛ふ様の、いひ知らずをかしさに、朝けの煙、軒端豊けく立上るも、やがて秋のかたみの、紅葉焚くらんと思へば、いと懐しくこそ。

折柄、嵐さど吹下すに、軒近き梢の雪、枝を離れて打乱る様、實に散る花かどあやしまれて、またさに春や來にけんと思はるゝを、山の端に、立迷ふ村雲の隙より、藍色したる空の、纒に顯れそめた

る林、只繪を見る如き心地のみぞせらる。まして一峰高き遠山の、頂遙かに晴れて眞白に降りつもりたる姿は、香爐峰の氣色さへ思ひやられて、かかる山住の伏家ながら、なぞ籠つるし置かざりしかど、今更打かこたれてなん。

○冬の黄昏 小川ろすめ

人目も草も枯れはて、いとゞむびしき夕まぐれ、悲しき思ひにはだされし吾は、何どはなしに、ふと座をはなれて、背戸の畔道づたひ、一歩く塵の卷をはなれながら、淋しき枯野をさまよへるなりき。

北風一しきり強く、梢にさわぎて、枯葉ひらくと頭上に散りかゝりぬ。

嗚呼、さても凄然たる枯野のさまかな。そもや、わかく、長閑やかに、はななくしかりつる花野の末、それにもまさるは、千草の花のどろく、見る目もあやに、蟲の聲々喧すかりし氣色は、らびこ。思へば静かにたどる足のもとまで、粟立つ様におぼゆ。樂しかりしよ、すぎつる春の花の頃、かをり床しき堇の花の、塵の世の汚れも知らぬ頬笑を、狂へる駒の蹄に、ふみにじられんわたらしさに、せめてはあせなん後の思ひでにもやど、あたゝかき吾が手に摘みて、つくりし紫の花束、それよ、こゝなる小川の水さよ

○作例

三画玉

く、心ありげにゆくが床しうて、あはれ、何方なりとも、世の塵遠
 き境に、永き春の樂しみを繰返せとて、そをそと浮べやりし、水
 はやさしく呷きつゝ、嬉しげなる彼の頬笑をのせて、ゆるく流れつ
 その行方も忍ばるれば、岸べに立ちてさしのぞけば、あなや、水か
 れくに薄氷して、底に落葉の朽ちるが見ゆるに、たが投げ入れけ
 ん、古草鞋の、半水の上にあらはれたるぞ、うたてき。
 力なき夕日は、斜に枯野の末にうすれゆく、木枯一しきり凄しく荒
 れて、廣き野面にたてるは、吾のみ。さなり、かしこに見ゆる老松
 の色ある一本と、吾のとみ、げにや、年寒うして霜にやつれぬ、松
 の緑、おどれる色のおどろかさよ。

神のたくみに、人の世を飾りし岡の紅葉、名残もなく、破りすてに
 し木枯のゆくへ、今こそは尋ねあひつるよ。琴の音色のそれならぬ
 ど、この松陰にたちて聞けば、よそに知らぬ風の聲ぞさこゆる。
 つれなき木枯の住家ならでやは。ふと見上ぐる松が枝に、烏瓜のあ
 くまで赤さが一つ、やうくすがりぬ、おもはずの様かな、高くも
 這ひまつはりしことよ。蔓も根もかれはてしさまの、哀れげなるを
 、尙しらぬさまに、少し打ちゆらめきたる、かくても頼む梢かど、
 哀れになん。
 しのふ思ひの穂に出で、かつては誰を招きけん、尾花が袖の、見
 るかひもなく枯れたるが、あなめくど、音にこそたてね、悲しげ

○作例

に吾を招くと見るに、淺ましうて覺ゆる涙ぐみぬ。夢の世に、現なき身の一生ながら、さるにても人の心の奥も知られて、若き吾が身の老いゆくさきも、頼みがたうちかこたえる。

吾どもわかず、佇む背に、小さき足の音、はたくと聞えて、十ばかりなる童の、つとはせりさぬ。織目あらし布子の、肌うすげなる姿いちらしく、霜とけの土、こちたくつさし草履、重げにひきて右手に白てうの徳利提げたり、あはれ、誰が家の子ども。父が歸りを待ちうけの、村酒買ふべくゆけるか、野末の彼方、夕餉の烟たなびける森かげ、竹戸のはどりに立てる人ひとり、夫やかへる、吾が子避しと待つなるべし。童よ、いそぎ歸れ、母は待ちます。さても

今宵の爐邊のまどぬは、如何にたのしからん。

朔風そと肌をかすめぬ。いたくも時をすこせしよ、吾にも人の待ちてますんに。

空には灰色の雲低くたれて、雪げの風、身を切るばかりに、晩鴉の聲もどたねぬ。いづこなるらん、大雪小雪、ふれく雪よど、凍るが如き村童のこゑ、かすかに聞えて、今しも六つの花びら、ひらひらど、吾が袖に散りかゝりぬ。

あはれ、明朝はまた、いかに埋れゆく枯野のすゑならん。

○懷古

古城の春を訪へば、荒涼たる殘礎、空しく残りて春光滿地、桃紅李白○人は皆、春の景色に酔ふのとき、杖を古城址に曳けば○萌へ出でし若草にも昔しのばれ○霜の朝、城址に出で、歩み往事を弔ふ○残れるは只苦むしたる石崖と、水淀める濠とのみ○見よ、蔦は紅く石に縋りて○夢なれや、江南の春色荒れて、芳草徒に彌生の名残を止め、うたてや、孤松の翠黛さび初めて、琴韻空して昔の魂を返さんと欲す○江流よどまず水悠悠○此處八百年の夢の跡○銀燭輝け

る玉殿、今は哀れや跡もなく○昔の榮花は夢と消ぬ失せ○國亡びて山河はあれど、小唄に全盛と謳はれたる其の昔の儂はなし○石垣は崩れかゝりて苔の深さに、古りたる年の數も知らる○夕陽の松の黒うして、水に影を落すも淋しきに○原頭に佇んで昔を偲べば○打ち合ふ太刀の聲にも似○鬼哭啾々として○古英雄の末路を吊ふに○杉のしげみに叫ぶ鳥の聲○雨に花散る夕べ○桃李空しく花さき○うたた征人をして悲しましむ○風も一さは身にしみて○虫も枯々になく哀れさ○榮花は一時の夢なりき○小高き丘に名残を留め、咲く梅にも昔しのばれ○金城鐵壁と頼みしも○徳をもて人の心を和げなば百年の城にもまさるぞと○身は死しても名は千歳に垂る○一痕の弦

○作例

月○弔ふ人さへ無く○空しく狐狸の栖む所となり○北風に吹かるゝ
 松は、千軍萬馬の響きをなし○くつわ虫の聲のみ勇ましく○夕日冷
 たう野末に落ち○西風蕭々として白骨寒し○當年の城址空しく耕地
 に化し○四方に漁唱の聲おこり○心なきの白雲ゆきかひ繁く○今一
 杯の土のみ餘す○尾花の波に殘月寒う沈む物凄さ○當年の王宮今何
 くにか尋ねん○山河依然として當年の俵を存し○山自ら高く水空し
 く流れ○土地の故老に事問へば○驚くに堪へし人間の縵遷○げには
 かなきは人の世よ○花に問へども花語らず、夕陽空しく西して秋風
 寒し○春は花、夏は涼み、秋は月よ紅葉よ、冬は雪よど○悲しき事
 も嬉しき事も○月は尙當年の光りを試み○花は年々に咲けども○空

しく興亡の跡を口碑に傳へ○萩が下に鳴く虫にも昔しのばれ○當時
 の金殿玉樓今何處ぞ、半は荒原に化して西風吹きすさぶ○山河は依
 然として昔に變らねども○人間の盛衰の事ども歴々と、花の開落に
 も知られ○一夢すでに千百餘年○龍争ひ虎搏ちし處○一本の老松は
 尙當年の俵を存し○鷓鴣の鳴く聲も哀れに○事は歴史に殘れど人は
 亡し○名は竹帛に垂れて千古の今に薫り○奢るものは久しからずど
 か、一時の榮華は跡もなく○空しく杖を夕陽に樹て○兒女の春を訪
 ふあるも、いかでか當時の事を知らん○春風に面して昔を語る人幾
 客ぞや○夕日にそゞ涙のはらく○碑ありて當年の事どもを記す
 ○人亡しど雖も功名千古に傳へ○流芳千歳○

○山水

吾れ某山に遊ばんことを思ふや久し○余頗る煙霞の痼疾あり○好んで山水の遊を試む○未だ其の境を踐むの期を得ず○余固より濟勝の具に乏しと雖も○某山の勝を聞くと久し○山水の勝に富むのみならず、一村皆梅花に埋めらる○げに天下絶勝の地○山秀で水清く○山は緯となり水は經となり○點綴するに梅花を以てす○盍ぞ一たび往いて遊ばざる○残月を肩にして城を出でぬ○行く二十町ばかり○行々地圖を按じて進むに○城を出で、西北に行く○同行するもの十餘人、皆同窓の友なり○行くこと數里ならずして一部落あり○此日天

晴れ雲無く○遠近の峰巒手に取るべし○危峰の天を撃ぐるは○山勢蛇の如く數里に亘り○横ざまに村の西端に走る○峰巒起伏して恰も波濤の打寄するが如し○高さものは樹なく、低き山却て蒼々たり○雲は咫尺に往來し○風に御して行くかど疑はれ○黛色掬すべし○鶏蹠人語共に白雲の中より漏る○路を夾んだる老檜修竹○身は天半に在るかども疑はれ○石磴は千年の苔深うして○石徑崎嶇○阪路羊腸として登るに難し○鳥道遙かに相通ず○樂研よりも凹みし小路を、魚貫して上るに○鐵鎖を垂れて上るに便にす○おのく難色あり○勇を越して攀ぢんとすれども○級を拾ひ足を聚め○足まだ陟らざるに氣すでに沮む○前者の踵は後者の頭を踐む○山は地も抜く千尺○

○雜

又なき勝地しやうちどなん世よに高く○牛うしの臥ふすが如ごとく、龍りゆうの蟠わだかまるが如ごとく、
 虎この嘯せうぶくが如ごとく、奇岩きがん千態せんたい萬狀ばんじやう、一々名狀めいじやうすべからず○山やままた山
 と連つらなりて、恰あたも波なみのうつ如ごとし○一山さんを送おくりて又一山さんを迎むかふ○山氣さんき
 肌はだに徹てつし、空翠衣くすいを撲うちつ○鳥とりの通かよふべき路みちもなき險けはしさ○右みぎに折をれ
 左ひだりに曲まがり○谷川たにがわの上に立たちて眺ながむれば○川急かはきうにして水走みづはしり○峯みねつぎ
 て又峰またみね、その晝つさる處ところを絶頂せつちやうとす○山は常つねに白雲はくうんの中に埋うづめられ○
 雲中うんちゆうの樹きは龍りゆうかど疑うたがひ、溪上けいじやうの石いしは虎こかど怪あやしまる○溪洗けいせんに影かげを浸ひた
 して千山動せんどうくおも白しろさ○山は雲中うんちゆうに見みぬつ隠かくれつ○千尺せんじやくの懸崖けんがいよづ
 べくもあらず○岩いはを抱いだき、樹じゆにすがりて立つ○山水さんすいの妙景めうけい此こゝに至いたつ
 て極きはまる○水石相搏すいせきあひうちち、其その響ひびと雷らいに似にたり○水は石いしに激げきして石怒いしどり

○風かぜは樹きに叫こゑびて樹撼きざふ○驟雨しゆうう來きらんとして山風さんふう先まづ起おこる○岩いはの形かたち
 のさま々さまざまくなる○山姿水態さんしすゐたい、殆ほとんど名狀めいじやうすべからず○深林しんりん未いまだ曾かつて斧お
 斤きんを入いれず○神かみさびて心こゝろもすみ○雲くもは脚下きやくかのに往來ゆきし、瀑たきは頭上かしやうに懸か
 る○山水さんすいの奇絶きせつなる、人ひとをして行路難かうろなんを忘わすれしむ○雨餘うりよの山々やま々みど
 り流ながれんばかり○境きやうは益幽ますくゆうにして山は益秀ますしゆづ○流ながれを乱みだして渡わたる
 ○水淺みづあさけれども清澄鑑せいじやうかんすべし○深淵しんえんその深ふかさを知らず、色いろは蒼碧そうへきにし
 て油あぶらを湛たみふるに似にたり○樹じゆいよ、老おい、石いしいよ、疲やす○水深みづふかさも澄す
 みたれば淺あささかと思おもはる○丸木橋まるきばしありて之これに架かす○怪あやしげなる板橋いたばし
 の架かるあり○深ふかさ測はかるべからず○名高なたかさ耶馬溪やまけい○谷たにに沿そうて上のぼり行ゆ
 けば○山碧やまきにして黛たゐの如ごとく○溪水けいすい燕尾えんびを分わかちて東西とうざいに流ながる○溪水けいすいの

響ひびき小琴せうごにも似にて○一水竹いちすいしやくを穿うちて蛇へびの走はるが如ごとし○一曲きよく又また一曲きよく、溪流けいりゆうの奇景きけいその變化へんくわ、殆ほとんど想像さうぞうすべからず○水石相激すいせきあひげきし、兩岸りやうがんの樹木じゆぼくために震動しんどうす○奇石きせきの多おほき一々かずかず數かずへ盡つくすべくもあらず○水みづに洗あらはれて岩角がんかくも尙なほなめらかに○谷たには皆石みないしにて清流せいりゆう鑑かんすべし○岩角がんかくに激げきするさま、雪ゆきの如ごとく、花はなの如ごとく、また珠たまを碎くだくが如ごとし○飛沫ひまつの日に映ひじては、五色しきの虹にじをさへ現げんす○瀑たきの落おつること永劫えいごう止とまずば勢力せいりよくの凝じるところ、穿うちて幾千尺いくせんせきの深ふかさに至いたるど○瀑布はくふにさし臨のぞみたる松しょう樹じゆは龍りゆうの水飲みづのむにも似にる○見みわたす限り目めもはるに○水澄みづみて遊魚いうぎよも數かずふべし○溪深けいふかうして魚肥うまゆ○又また此こゝの世よの人ひとたるを覺おぼえず○乱立らんりつ筍たけのこの如ごとく、雲靜くもしづかに之これを護ごす○兩岸りやうがん合あはする處ところ一泉いちせん下くだる○老杉路らうさんろを擁擁

す○銀河ぎんがの倒たふに懸かるかど疑うたふ○飛瀑ひばく二十丈じふしちやうばかり○飛沫ひまつ人の衣袂いへいを濕うるし、六月ろくがつも尙寒なほさむからしむ○白龍はくりゆうの天てんより降ふるにも似にる○雨降あめふりての後は瀑身はくしん更に肥こむ○夏なつの空そらも尙寒なほさむうして肌はだに粟あはを生しせしむ○石崖せきがい削けり成なす○拳石けんせきの微かなるも尙なほかのく奇狀きじやうを争あふ○石筍せきじゆん空そらを凌しのぎて峙そつ○平たいかなるは砥との如ごとく、尖すさは劍けんをも欺あざむく○翠屏すいへいを展のべたる如ごとく思おもひせらる○人立じんりつして貌踞けいぎよす○小せうなるものは兔うさぎに類るし、大おほなるものは虎とらに似にたり○一たび風雨ふううに遇あは、將まさに飛騰ひとうせんずるさま○洞どうあり廣ひろうして數十人すうじゅうにんを容いる○洞石玲瓏玉どうせきれいらうたまの如ごとし○火ひを燭しよくに點として行く○洞ほらの深ふかさは數十間すうじゅうけん○其そのの深ふかさを知しらず○蝙蝠人へんぷくひとを掠かすめて飛とぶ○古來こらい人の入いるを禁きんす○鬼氣人きんきに通とりて毛髮もうはつを豎たたしめぬ○相傳あひつたへて仙人せんじん

の宅る所とす○岐曾川は天下の絶勝○舟よりして桑名に下らんとし
 て○舟行くこと矢の如し○水急にして舟疾し○兩岸皆行き、舟の走
 るを知らず○急流にして舟行を警しむ○津人舟を操ること自在○溪
 流急にして寸進尺退○一日にして千里を下るの概あり○岩に中らん
 どして幾度か、人の肝膽を寒からしめたり○下ること五六里、川漸
 く廣うして水漸く緩○四望頗る佳なり○兩岸の人家さながら畫趣を
 成す○白帆は夕陽に映えて赤く○白鷗の夢も静かにして魚歌遠近に
 起る○落霞水を射て紅なり○微風かもむろに小舟を送る○晚風の便
 を借り舟を西に走らす○四方の峯巒暮雲紫に○紫翠江上に堆し○
 煙水遠くこめ○漁莊處々の江村に點在し○風光畫に似たり。

春の山水 何れの山も花曇りして眠るが如し○雪の被衣をぬぎ捨て
 霞の装うるはしく○妓よりも嬌なる春の山の姿○やさしき姿を入
 江の水にうつし○雨の降る日は愁ふるが如く、高く低く書樓の前に
 影をおとし○半は花に掩はれて姿も艶に○花の雲を分けて頂に上れ
 ば、處々の村を脚下に落ち、寸馬豆人、身は雲雀の聲を踏んで立
 るなりき○流る、谷川の水も薫りて掬ぶも心地よし○花を浮べて流
 る、小川のやさしくも○日頃は猛く見ゆし山も春はやさしく見ゆる
 も、己が心からにや○山腹のみ寺も花に埋められ、鐘の響きのみ緩
 るう流る○往來の雲影も心静かに○み寺の塔のみ花間に抽き出で
 ○谷川に栖む小魚の夢も薫り○溪川に沿へる藁屋にも春は流石に音

○作例

三五廿一

づれて、兩三株の梅花今を盛りと咲き○私なきの春はみ山住ひの
 家にも吹き○山裾は薄霞して 夕日を受けし花の山、殊に美しく○
 夏の山水 花の衣をぬぎ捨て、緑涼しく○青葉若葉の暗らしげりぬ
 ○花にも増してよき眺め○日日にしげりゆく青葉のかげ○水もいよ
 く清く○木下かげに沸き出る岩清水○淙々たる響きにも暑さを洗
 はれ○旅人の生命は此の岩清水かと思はれてゆかし○杜の樹々は緑
 の雲を沸し○雨後は雲の往き交ひしげく○山腹は雷雨なるにも拘ら
 ず、山の頂上は晴天なるもをかし○全山さながら濃き墨を流したら
 んが如く、俄に催す白雨○前山は雨降りて後山は晴る○驟雨の雲脚
 江上の山に往き交ひ○山は夢よりも淡く白雲中に峙ちて○山青く水

清く○月は鴈聲の起る處に淡し○昨夜の雨に緑も肥ぬ○溪川の水の
 響きは小琴のそれにも似通ひ○山の影、水の響き、何れも涼しから
 ぬはなし○山の端に上る月かげ涼しく○山どなく水どなく皆涼影○
 秋の山水 木の間に秋の聲してより山路涼しく○西風吹きそめてよ
 り林衣まばらに○蛸の鳴き聲も忙しく聞ぬ○秋の山路の旅淋しく
 ○萬山樹枯れて骨あらはれ、千澗水落ちて石出づ○骨だちたる秋の
 山々○水涸れ盡して眺め淋しく○百尺高さ瀑布の水も瘦せ○木葉落
 ちては山更に高し○山々の紅葉にしきを飾り○夕陽に映はては一入
 の眺め○燃わたつばかりの夕紅葉○白雲の朝、紅葉の夕べ○秋の野
 山は分けて詩によく○月の影小さくして山高し○木葉落ちて寺樓あ

○作例

らはる○紅葉の水に流る、錦を鏤めしにも似○流る、水も紅に○
 夕日冷かに西山を下り○疎鐘緩く山を出で○樵歌の聲ありくと山
 より聞ゆ○鹿の鳴き聲、あきあきとして月前にさこゆ○書を欺く秋の山○
 冬○の山水 紅葉に秋を飾りし山○一たび木枯の吹きそめては○目も
 あてられぬ眺め○骨たちたる冬○の山○一時雨毎に木の葉落ち尽し○
 骨ばかりに瘦せし冬○の山○春は花、夏は緑、秋は紅葉に眺めよかり
 し山も、あはれ冬となりては願みる人もなし○寒月のかゝるも物凄
 し○溪の水も凍りて音なし○雪の積りては水晶の如く玲瓏たり○幾
 多の村々は玉の屏風の中に在り○寒月に映じたる冬○の雪山○眺めも
 奇しく○雪の夕べに歸る鴉の點々○鐘の音も冴ぬ。

○海

櫓の音いと低う舟は蘆をめぐりて行く、力なき櫓は幾度となく運ば
 れて、淋しき方へ、淋しき方へと行くなり○松風の響き波の音、夕
 暗はのかに四邊をこめぬ○白帆かすかに二つ三つ、南に馳せて夕風
 の海は遠くく末廣りつ、さながら夢のやうなり○長汀曲浦うち烟
 りて○何處よりか磯唄の一節かすかに聞ゆ○磯馴松の夜嵐に和する
 波の音○仰げば廿日餘りの月は、今し蒼海の中より出でぬ○見波せ
 ば渺として涯しも知らぬ大海原○白く遙かにつゞける真砂の濱邊に
 ○かすかなる夕千鳥の聲を聞きつゝ、吾は獨り佇みぬ○遠き沖へよ

○海

り、絶えず白馬の奔るが如くに、寄せくる大浪小浪○十丈の岩に當りては、碎けて白雪と散り乱れ○平かに熨せるが如き、鏡にまがふ平和の海○たゞ折々岸べを洗ふ小浪のさわくと、磯馴松風の音に和するは、天より漏れくる自然の妙なる小琴のしらべか○遙か彼方より歸る白き真帆片帆の二つ三つ、そがあたりには夕日輝き○鷗の驚きもせで、夢穩かに浮べるは、げに心ゆくばかりなる眺めかな○夜はまだ明けやらぬ海面○朝なぎの静かなるを眺めずや○麗はしく彩色せられし横雲○朝風一陣颯と袂を拂へば、ほがらかに白みゆく東天○やがて黄金色美しき幾萬條の征矢は、ひとしく海面に射かけらかぬ○夕日すでに入りはて、月漸く東山に出で○水が空か、空

が海か、見ぬわかぬあたりより、月は上りぬ○黄金白金の彩り美しき、きらりと輝き漂ひて○はてしも知らぬ海面いつても明かになりぬ○走るは金龍の如く○かくも、朝な夕な平和なる海は○明媚なる其の風光○青松を戴ける小島の幾個ともなく○長鯨の潮を吹くは壯快にて○心はそゞろ恍惚として、神韻縹緲の裡にさまよひき○吹きすすぶ風に怒れる荒浪○藍を流せる如き海面には、白帆の影のみ一寸高う○漸く暗は四邊をこめ、浪の音かすかに、鳴く千鳥の聲もいと幽かに聞ゆ○遠き沖の方には、漁火の影も漸く消ゆき○一曲の棹歌手に取らるべく聞ゆ○夕榮の色あどなく褪せ去りて○光りうすき宵の明星は、浪の上遙かに高し○渺茫として見わたす限り空う

つ波○白鳥の夢驚かせつ、水馴棹を斜におせば、舟は次第に動き揺
 ぎて、葦の葉分けの櫓の音かすかに○長汀曲浦十里の松の下露に、
 旅人の袖ぬれて冷たさ身にしむ黄昏時○三里の長汀、一帯の乱松○
 夕日を浴びて波路はるけく黄金の色に燃ゆ○漁舟一葉波間に浮び、
 舟も人も黄金に彩られぬ○松風の波に答ふる聲あるのみ○斷岸削り
 なして數百尋○怒れる波は荒れ狂ひ○曉はやく樓下を漕ぎゆく舳の
 音に夢破られ、戸を推し欄によりて望めば、涼しき潮風髪を吹いて
 いど心地よし○岩にあたりて吼ゆる波の音○水煙ふかく立ちこめ○
 水天鬚鬚たる彼方に白帆の一つ○汐路はるけき千里の空○目に入る
 ものは鷗のそれにも似し、一點二點の白帆の影○糶糊として涯なし

○雷にうする、帆かげ島かげ、夢のやう○松原をわたる鐘聲、一杵
 又一杵、夜の色は静かに来る○太陽は今日の名残を西山に惜み○磯
 館の夕べ、ひとり高樓の欄に倚る○鎌の如き三日月の、今しも出で
 なんとする夕を、漁村の燈火ひらめき、汐風の心地よさに○海はい
 よ、風ぎて、水面油を流せるが如し○幽かなる岬の彼方、今しも音
 なく、のぼり行く、月の影寒くして、波音高し○見返れば砂濱續の
 磯村○松は馴れし小琴のしらべ止めて、たゞ黒う眠れり○あ、此鏡
 只有るものは月と星と吾と浪の音とのみ○折から汀に漕ぐ漁火の
 影○磯べの村落は紫色を呈して夢よりも淡く、たゞ聞ゆるものは波
 の吠ゆる聲のみ○百尺の斷崖屏風の如く立ち○十里の海の景色は○

白妙を踏んで亂松に途窮まる處、吾は波もいと静かなる大磯の夕暮
 に、何心ともなく逍遙ひ出でぬ○海の遠より迫り来る夕げしき○磯
 馴松が枝くすしき音を立て、妙じき樂を奏づる時○玉藻匂ふ磯の
 白浪○吹き送る海風に衣袂を拂はせて○近き海の面には、白帆の影
 三つ四つ、樂しき棹歌の主を載せ○十里の浦曲は畫の如し○一幅の
 水彩畫○高く低く磯べを洗ふ白波は、移らふ時を刻むに似たり○更
 行く小夜の汐風は、蛋の葦屋の燈火をゆすり○めぐりくつて波に映
 らふ青松○潮の香高く肌を洗うて○鐘聲は江を渡り山に應へ、更に
 江に歸りて波に迷ひ、霜につままれて、餘韻淋しく傳ふ○入船出船
 の影しげく○崖高く松は老いて石危し○斷崖割立、怒濤雪を碎く○

春○ 十里の春江波みどりに○潮の香たかき春の磯邊○鷗の飛び交
 ふさまも優しく○桃の磯邊は赤ら霞み○一簇の漁村は霞に鎖され○
 遠近の島山の影もおぼろに○往き交ふ白帆も眠たげに見ゆ○入江の
 柳やうく緑に○油を流したらん如き春の海○船は波をすべり行く
 心地して○さらくど打寄する春の波○常には荒き北海も春は流石
 に穩かにして○波の上に坐るが如き漁舟の一つ二つ○波の音静かに
 暮れ行く磯村の春○柳陰に釣する翁○柳烟り花かすみ○霞を破る棹
 歌の一曲○磯寺の鐘緩う流れ○永き春の日は磯村に落ち○處々に見
 ら初めし漁火○桃咲く岸には日未だ暮れ残り○漁燈點々と海の淋し
 さを飾り○暗を縫ひ来る漁歌の聲手に取る如く聞ゆ○紫匂ふ曙の

海○八重の汐路にはやかに○礮削松の緑おぼるに○

夏○波の音涼しき夏の磯邊○松風の音に夏を忘れ○松に差し上る
月も緑に○夏の九十日風を生命と○暑さを知らぬ磯館○岸を洗ふ波
の音○波間を潜る月影涼しう○夕立晴れて島山影近う見ぬ○洗ひ出
されし遠近の島嶼○此處人間の清涼世界○見渡す限り蒼々としたる
海原○松原越しに見ゆる白帆も青く○殊に賞づべき夕暮の景色○入
江の柳うち煙り○入江を隔つる村○柳もおぼろに暮れそめ○世に名
たる海水浴場にて○都人士數多避暑して○満ち來る潮に送られて出
る夏の月○朝夕幾度どなう海水に浴し○心の垢を海に洗ひ○浴後は
岩が根に腰うち掛け○涼しき潮風に髪を吹かせ○暑を逃れん由もな

けれど○暫し海邊に暑さを忘れ○清けき砂濱を月に歩みなぎして○
小波に月の影碎くるも涼しく○月に棹さす心地よさ○雲の峰漸う崩
れて夕日落ち○微風は先づ入江の柳に音づれそめ○夏は海こそよけ
れ○濱邊の涼しさを都の人に送らばやど、思へど甲斐なし○

秋○清く澄み渡れる海面○蘆の花散る入江の夕べ○磯邊の紅葉夕
陽に映ぬ、紅更に紅○蓼の花も紅に○土手の櫺紅葉日々色づき
○夕陽の影冷かに○柳は秋に老いて烟をなしがたく○秋の空いとも
晴れ渡りて遠く水に連なり○夕暮の鐘も淋しく波を渡りて聞ゆ○秋
風は磯村に立ちそ初め○夜に入れば潮風冷かに○月の夜は分きて面
白し○蒼茫たる海には月の波黄金を沸かし○月に逍遙ふ秋の海邊○

○作例

月に船を放つも興多し○赤避の遊も思ひやられぬ○夜いよ、更け月
 いよ、清し○何人の吹く笛の音にや澄みに澄みて聞ゆ○月の光り江
 上に流れ○月明かにして天つ雁もよまるべし○一扁の舟を流れにま
 かせ○世此の人たるを打忘れ○いとゞ長き秋の夜も月に更し○
 冬○入江の水も凍らんばかり○蘆花も散りはて○江上のみ寺より
 響さ来る鐘の音寒う○漁火の瞬さいと寒し○友呼びかはす濱千鳥○
 雪の入江に釣する翁は畫中の景○空一面の雪雲○雪雲しげき磯村淋
 しく○落葉の時雨に暮るゝ十里の磯○雪に暮れゆく海村○見上ぐる
 山は雪積りて眞白し○水禽の夢も寒げに○海も冬枯れて眺め淋しく
 ○雪降りそゞ波枕○蓬窓の夢いとも冷かに○

○園池

山に倚り水に沿ひ邸を構ふ○地勢によりて園莊を治む○園は甚だ廣
 からずと雖も○環らし植うるに修竹と野梅とを以てし、泉を引いて
 池をつくる○別墅は一高地を以て之にあつ○路は迂曲して竹に入り
 ○園の廣さ百畝ばかり○四時の勝に宜しく、就中月はいと妙にて○
 南は海に面したれば○栽うるに花卉を以てし○亭を竹間に構ふ○避
 暑の邸どなす○地は都を隔てたれど、新しき事どもは其日に知られ
 ○都の塵も至らで心静かに○僅かに數客を容るべしと雖も○某氏の
 別莊と聞く○溪流を引いて園に入れ○池の中央に亭を築き、之に通

するに小橋を以てす○閣は小丘の上に在りて、通ずるに小徑を以てし○石をたゝみ磴を作る二十餘級○山秀で水清く地自ら異り○門を繞る皆水○水は濛々として枕頭に鳴る○吾が友が經營に屬し、最も山水の眺めに富む○南方は際涯なき海原にて○竹を穿てる小徑の幾曲り○一拳石の細く雖も心を用ゐざるなし○竹樹の蒼々たる、溪水の潺々たる○風來れば竹動き、月影翠を碎く○嘉石奇樹 ○修竹竿盛夏の頃と雖も日を見ず○梅密に竹疎に○紅葉松際にまじはる○蕙荷風に動きて香を送る○四時花の絶ゆることなし○名づけて百花園といふ○山水園池の勝之を兼ねと謂ふべし○群峯几席の間に来る城川に仕りと雖も修竹密にして俗を遮る○四時の眺め一として

佳からぬはなし○景物の宜しき他に其比を見ず○意の適する所に随ふ○最も緑陰によるし○樓閣の觀るに足るべきものなしと雖も、山水の景は此處の右に出るものなからん○盛夏と雖も更に暑さを知らず○松濤竹聲自ら夏を消するに足る○江山の勝を領し、四時の美を兼ね○臥して松風を聴く○樓は直に海に接して○坐して明月を迎ふべし○往來の白帆も欄干に近う○園の勝に十あり曰く何々○余を引いて樓上に飲み、遠近の勝を説く○身を商賈に致すも心は山林に在り○情自ら高く○河鹿の鳴く音涼しく○客至ることに之を亭上にひき、文を談じ詩を論ず○情を園池竹石の間に肆にし、以て塵事を忘る○互に襟を披きて談笑す○城市を距ること敷町、しかも塵喧の侵

○園池

すなし○樓に藏する詩書萬卷○跡を山水の間に寄せ○江を隔つるの
 島山呼べば應へんとす○漁歌も手に取るべし○地は甚だ僻陋と雖も
 山水は則ち奇○最も静閑の地を下し○一茅屋を購ひ蘿を引きて籬と
 す○終日蹄輪の響きを聞かず○日々琴樽を友とし○四山の雪玲瓏○
 雪の眺め最も奇なり○詩友の雪を侵して訪ひも來ば○村酒に雪を賞
 するも面白し○日の西に沈むをも忘れ○清談に時移りて日既に西す
 ○月既に上りたれば、夜の景色をも併せ賞し○夜の眺め殊にをかし
 く○記を余に請ひしかば、一日の遊を筆にして之が責を塞ぎぬ○欣
 然として之を記しぬ○目前の勝を記すのみ○記して未だ遊はざる人
 に告ぐといふ○記して之を壁に置く。

○城邑

人烟稠密○中國街道の衝にして人家櫛比○軒樓相接し市坊繁華○人
 煙萬戸○地は帝都に遠さも繁華日に盛大は赴き○煙火の密なる都帝
 に滅せず○一城の煙火繪くが如し○居民數千、商漁雜處し、海邊の
 一繁華を成す○人馬絡繹として絶えず○此處は舊城下にして郡内第
 一の都邑○百貨の聚散近郡に冠たり○物盛んに人多く一都會たり○
 繁華佳麗の地たり○北に鐵道の通するあり、南には港あり、交通の
 便至らざるなし○百貨の聚散場となり○舊城樓は尙見るべし○城址
 は公園となり、山水の勝によるし○出船入船○帆檣林立○山川の一

○城邑

都邑にして○百貨輻湊○山に沿うて街をなす○郡内の名邑にして工業尤も發達す○呼んで小京都といふ○古より小浪華の目あり○珠樓參差として江に枕む○酒亭妓樓別に一區をなす○山衢整然たり○西海の要津にして船舶の出入、日に千を以て數ふべし○陸に汽車あり海に船あり、交通至便○地は西方に偏するも亦一都邑たり○民俗質樸○陸運は昔日の如くならざるも、海運は大に發達し○市内には幾條の溝渠相通じ、小舟は縦横に往來し○市中の賑かなる山中稀に見る所○今も尙昔日の面目を保つ○藩公の餘徳といふべし○汽車の開通と共に一層の繁華を來し○古城山は依然として緑に○山水の眺め舊に依つて佳なり○商業の盛んなる近國に冠たり○蠶絲の生産地と

して名高し○家々には溪水をひきて池にそそぎ○温泉場として著名に○四方の商賈相集り○旗亭軒の並べ○絲竹の聲さへ處々に聞ゆ○酒燈の紅なる絃聲のしげき○直に船を樓下に繋ぐべし○笙歌沸くが如し○人戸千に充たすも雖も民みな富む○半は商にして半は漁○中國の要地にして輪蹄しげし○夙に舟車の便あり○古よりの名邑にして明治に至りて更に面目を一新す○住めば都どこそいへ○商業の繁華なるのみならず、極めて江山の景色に富む○滿城を擧げて商賈といへど、民俗道義に厚し○學事大に盛んに北に江流を扣へ○帝都を北に距ること十里○四面皆山にして別に一商區を形成す○交通の便は之を川流に借ること多し○地は山陽道の咽喉にあたり○山は馬

○城邑

背を借て越すべく、水は舟して渉るべし○一條の河流は此地をして
 繁華ならしめ○規模小なるも商工業の事備らざるはなし○山中の一
 小邑に過ぎねど、自轉車さへ往來するに至りぬ○電車開けて一層賑
 かに○商家軒を並べ○春の眺めは舊城址に如くはなし○町は東西に
 分かれ、一橋川に架して相通ず○百貨概ね辨せざるはなし○水力を
 借りて電燈の設けあり○十年前の人にして再び訪ひもせば○凡百の
 事ども面目を改め○市内は商業殷賑にして、市外は沃野打開け、農
 亦盛んなり○農工併せ得て此の隆盛を致す○地は高燥にして水害の
 虞なし○國中の都會を問はゞ先づ、指を此處に屈すべし○商に敏捷
 にして情に厚し、是れ他に比なき所とす。

○戦争

仁義の兵を擧ぐ○固より將に將たるの才ありければ○向ふ所敵なく
 ○破竹の勢もて進む○敵も味方も入り亂れて相戦ひぬ○山をも動か
 すばかりの鯨波の聲に、色めき初めぬ○一を以て千に當るを得べし
 ○一騎當千の武夫○硝煙彈雨の間に馬を立て、三軍に指揮す○精兵
 五百○奇を出し勝を制す、變化神の如し○人となり勇にして智あり
 ○機に望み變に應ず○敵の寄すること潮の如し○一齊の射撃、聲に
 應じて驚るゝもの無數○固より敵は烏合の衆に過ぎざれど、地の利
 を得たれば○短兵急にせまる○號令嚴明にして衆奉せざるなし○其

の陣堂々、其の旗正々○善く少を以て衆を撃つ○勇氣日來に百倍す
 ○策を帷幕の中にめぐらし、勝を千里の外に決す○兵を用ゐること
 神の如し○先んずれば人を制し、後るれば人に制せらる○百姓安堵
 す○刃に血ぬらずして日に數城を降す○背水の陣を布いて敵に當る
 ○撫するに恩威を以てす○到る處風を望んで相歸す○戦へば必ず勝
 つ○勝敗は兵家の常といへども、善く機を察す○成敗の機は今日に
 在り○勝敗の決する實に此一戦に在り○恩威並び行はる○兩軍相持
 すること半歳○一水を隔て、陣を取る○伏兵齊しく起り、前後より
 之を撃つ○短兵急に肉薄す○死を輕んずること土芥の如し○水陸よ
 り齊しく攻む○刀折れ矢つき○獨り孤城を固守して降らず○勇將の

下に弱卒なきの喩へ○風雨に乗じて敵を襲ふ○流石に金城鐵壁と頼
 みしも○砲聲天に響き彈丸雨注す○之を大原に邀へ撃つ○鐵騎を雪
 中に驅りて進撃す○兩軍相接し死傷算なし○雌雄を一戦に決せんと
 欲し、互に戰機の熟するを待つ○死屍野にみち川を塞ぐ○積骸山を
 成し流血は川をなす○一城を屠つて志氣大に振ふ○賊大に敗れて北
 方に走る○僅かに身をもて逃る○敵の糧道を斷つ○一軍は間道より
 し一軍は本道よりす○天寒うして士卒凍飢す○流血川を成す○將士
 相視て色を失ふ○背き走るもの日に多し○長驅して京師を襲ふ○我
 が軍大に利わらずして退く○壘を高うして敵の來襲に備ふ○單騎敵
 中に突き入る○一刀の下に敵將を斬る○銃劍を被ること數ヶ所○元

氣未だ衰へず○將に代りて自ら全軍を指揮す○孤城を死守すること
 百日○外に援兵の來るなく○將卒心を一にして守る○げに天險の事
 どて容易に陥らず○川に溺れて死するもの數千○一軍みな死す○死
 するもの千餘人○命旦夕に迫るも神色自若として○古英雄の風あり
 ○僅かに血路を開きて出づ○敵を斃すこと無數○徳を以て四民を安
 んず○兩軍相和し天下はじめて無事○砲烟地を蔽ひ咫尺を辨せず○
 凱歌を奏して歸る○賊白旗を樹て、降を請ふに至る○國內平穩に歸
 し四民安堵す○皇軍はじめて凱旋す○一死名を竹帛に垂るゝの士多
 し○英名千古の下に薫る○功を論ずるに各等差あり○將士悉く錦
 衣して郷に歸る。

○哀悼

吾はいど數多き友をもてり、そが中にも最も親しかりしは○吾は寒
 燈の下に、そゞろに過ぎ來し方を偲びて、懷舊の情を繰返すなりき
 ○嗚呼、吾は無二の友を喪ひたりき○月は曇るともいつか下界を照
 し、花は散るとも再び咲き匂ふ時あらん○胸ふさがりて 腸はひき
 裂けんばかり○君が形見の寫眞は日々に薄らぎゆけど、吾が心に印
 せる君が面影は、長へに消ゆる能はず○君は一度逝きて長く歸らず
 ○げに人生は朝露の如し○何れ終りはあるべけれど○僅か十八を一
 期として、歸らぬ水の流れとなりましぬと思へば、いかで悲しから

○哀悼

ざるべき○吾が心に残れる君が面影は、永久に失せやらねど、再び
 優しさ君の姿を見るべしやは○さらぬだに冬の寒さは、身を劈ざく
 ばかりなるを、木立茂みし中の、君が奥都城訪はんとて出でにき○
 共にめでにし白菊の、今はなき君が手向となるぞ口惜し○水ひつさ
 げ霜柱ふみつゝ、絶えて訪ふ人もなき、み墓のはどり○涙にくれゆ
 く日はへ、いとゞ名残の惜まれ○かへらぬ旅路に逝きたまふ○そも
 や君と吾とは、花の朝や月の夕、四つの袖をつらね○悲願を共にす
 る茲に五年○昨日の花は今日の霜となる哀れさ○夢幻と變るうき
 世のさま○うき世はあすか川といひとめしも實に理ある事○人の
 生命は日陰待つまの朝顔にも比すべし○生者必衰、會者定離の喩○

花も老い初め、杜鵑の血に啼く頃○哀別離苦のかなしみ○あはれ血
 に鳴き叫び○共に愛でたりし牡丹は崩れねど○花の散る日を君は逝
 きぬ○掬べど盡さぬ吾が涙○げに春の花秋の月○たのむ木陰に露の
 漏り○世は何事も夢とあきらめつゝも○げに人生は風前の燈火○生
 前の事ども枕の上に、繰返すことども幾度ぞ○去年の櫻狩りには共
 々に○同じ日には生れ出でずとも、同じ日に死なんとまで誓ひてし
 君○幾度かみ墓をなづれど冷たうして石語らず○香煙淋しく墓門に
 たなびき○夕日淋しき墓路たどりゆけば、苔深き石碑の吾を迎ふ哀
 れさ○名も知らぬ小鳥は何をか鳴くなる○落葉のばらくと袖に降
 りそとぐ○落葉に和する袖時雨○野花の開くも哀れさいや増し○十

年ぶりにみ墓の苔を拂ふ○晝なれを境静かなれば蟲鳴く哀れさ○寒
禽の鳴きさけぶ○花は去年の樹に咲けども君は見えず○秋風に立つ
み墓の影哀れに、人の弔ひ来るは稀なり○追懐の涙にくれゆく秋の
日○み寺の鐘の淋しう響く○夕風に送らるゝ鐘の音悲しう○歸鴉の
點々として埒に急ぐ、秋の夕暮の空○夕日を追ひつゝ歸る鴉の一つ
二つ○香の煙の影淋しく○夕日に長う地に曳く吾が影の瘦せ○落葉
の袖を掠めてはらく○霰さへ降り出で○冬木立のさむる哀れに○
西山に懸れる三日月の影さらくど○奥津城近う落つる月かげ○萩
が下に蟲鳴きさめ○蟲の聲もかれくゝに○み墓の物言はぬ恨み○思
出の絲を辿りつゝ歸れり○誠の地下に通へかし。

贈答、羈旅を

○交遊

見合すべし

佐馬のよしみ○盤雪の友○金蘭の交りを結ぶ○金石の契り久しく○
魚の水に於けるが如き親しみ○膠沫の交り淺からず○心の奥底を語
り明し○互に過失を戒めあひて憚からず○十年一日の如き友誼○そ
の交誼の厚さ、實に金を断せんとす○知己を得ること實にかたし○
その交りの深さ、古の陣雷にも譲らず○いよゝ窮していよゝ友情の
切なるを見る○宴樂に成りし友、いかでか艱難を共にするを得ん○
机の島の友千鳥○莫逆の交を結んで、永世渝ることなし○骨肉より
も尙したしく○意氣相投じて、一見奮知のおもひあり○悲歡を共に

すること十餘年○一樓の内に起臥し○一窓の雪に學び○互に慰めら
 れつ慰めつ○青燈の雨に十年の昔を語りつくし○互に無事を打ち喜
 び○語らふ事も後や前○相逢うて先づ涙を溢るゝ○餘は涙に言はた
 るもをかし○兄と敬ひ弟と慈しみ○げに友は斯くありたきものよど
 ○金蘭薄上の友、檢し來れば多くは青雲に上り○同窓の友は今や四
 散し○塵々にさまよふ萍蓬の跡はれに○此頃は雁の便もうち絶え
 ○生死を共にせんと誓ひ○君や今は何處ぞ○月あかるさ夕、ひと
 り當時を想へば○交りを結ぶは易く、信を守るは難し○世に酒色の
 友の多さを、うたてし○互に青雲の志を懐き○人を憐むの情かふし
 ○信義に驚く情に富む○友は情義をこそ尊むべけれ。

○贈答
 交遊、羈旅を
 見合すべし

君と相見ざる茲に幾年○花開き花落つること既に幾年○君と一別以
 來七星霜を経ぬ○山は舊によりて秀で水空しく流る○古梅の東風に
 かをること猶當年の春に似る○花開き鳥鳴き、春は此處に音づれぬ
 ○都の春景色如何にと、思ひぞ煩ふ○君には故山の春を如何にと問
 ひ給ふか○花は依然として當年に似たり○君と袂を分てる處、板橋
 斜にかゝり水空しく流る○君恙なきや否や○櫻月夜に逍遙しける事
 ども、端なく旅窓の夢に入り○春は去年に似たれど、君や去つて天
 涯に在るを如何すべき○詩歌に心をやりて慰む○花咲く毎に思出多

○からし

し○分袂茲に一月あまり、世は早みどり涼しき青葉若葉の空となり
 ぬるよ○花を傷むの杜鵑、音づれをむる眸日今日○人を懐ふの夢は
 成り難く、終宵孤枕を撫しつゝ○天涯に思ひを馳せ○み手紙を幾度
 どなう繰返しし〱○消ぬなんとする燈火をかき立てつゝ○納涼の舟
 を共にせし事もありたりき○橋上の月に倚り、詩に耽りし事もあり
 たりき○君と共にせる事、今は夢に入るのみなり○何時にか相逢う
 て遊びを共にせん○曾つては美人と評せし、庭の牡丹も崩れぬ○せ
 めて寫眞を君にまゐらせ○鎮守の森に残りし曉の月を掠め、思はせ
 ぶりに鳴き過ぐ杜鵑○西の空に残れる月は夢よりも淡し○風につれ
 雨につれ、心いたぬ日とはなし○近頃は雁の便も打ち絶ぬ○近

況を知る由もなし○早くも秋風吹きそめ○別れを秋風に惜みてより
 ○月明かなる夕○絡緯愁をかりそめ○蟲の鳴く音も哀れに○人の愁
 ひを助け顔に鳴き立つる蟲○聲も涼しげの鈴蟲○都の秋は如何にぞ
 や○故園の秋は如何にと、夜毎に天涯の夢を勞す○秋の七草今を盛
 りに野の景色を飾り○露を帯びては尙更清けし○自ら手折りし一束
 の草花○語らう友もなき天涯に、君が便を聞く嬉しさ○細々しき事
 ども筆に盡し難し○一行の書に萬縷の情をこめ○君が篤さみ心は文
 の表にはの見ゆるも、嬉しき事におもひ○頓に涼しくなり、み氣色
 如何にと○空に雁のたより絶ぬ○君が消息を聞くを得ず○書を君に
 致すを得ず○そのかみの夢に憧れ○越方をおもひ續け○月の鏡は君

を照し得ず○千里を隔て、互に月に思ひを寄す○千々に碎くる吾が
 おもひ○只何事も夢とあきらぬ○北より来る雁に信なく○南に向ふ
 雁に文寄せ○秋雨の窓に燈火挑げつゝ認めぬ○末に書き連ねたる一
 二首の詩○只おもひを書き連ねたるまで○詩は拙なくとも赤心はこ
 もるべく、草々に見過し給ひそ○秋の雨夜は分きて淋しく○心に浮
 ゑは友の身の上○蟲の枯々に鳴く夜半○學舎の燈火暗く○夢は故郷
 の空に馳せ○身は遠きに在るも、夢は千里を隔てず○詩の筆執るに
 懶し○鄙には早くも冬の來て○今朝は雪さへ降りつもり○都はまだ
 紅葉の眺めも老いざるべきに○淋しき冬の夜半、夢も結び難く○さ
 らぬだに永き夜の、人を懷うてはいとゞ更けがたし。

○羈旅
 交遊、贈答を
 見合すべし。

ひとり天涯の孤客となり○殘雪未だ消せずして野梅すてに開く○寒
 驛の疎梅春信をもらす○互に春風橋上に柳を折り○梅の咲きそむる
 初春を別れて○遠く天涯に向ふ悲しさ○故郷の春を知れとや、文に
 巻きこめられし梅花の一輪 輪○鳥の鳴く東の空に出立ちたまふ○
 五十三驛の春を、汽車にして眺めたまふ、如何に樂しかるべき○い
 かに心ゆく花の御旅路ならん○到る所は梅の花盛り○いと面白さ
 旅○都も折柄花の眞盛り○名所古蹟を尋ぬるも、極めてをかしき事
 なるべし○故山の雲に別れしより○只夢のみ西の空に馳せ○故山の

春なつかしく○他郷の花に詩興を借るも風流にて○遂に故園の花月
 に如らず○他郷の春に逢ふこと十年○花は咲けども而も去年の花に
 はあらず、嗚呼人は天涯に老いぬ○急ぐともなき旅なれば、花の木
 陰に宿りなごして○花の香たかき旅衣ぬぐも惜しく○春の夜を櫻咲
 く土手に逍遙ひ○奈良の春を探り○京都東山のけしき、さては西山
 嵐山をはじめ、嵯峨、御室と○蝴蝶を旅の道つれと○空には雲雀地
 には蝶舞ふ春の日の旅○行手は花曇りにて○馬蹄も輕き十里の堤○
 陸には歩み海には舟し、其日くく變る旅のさま○岸打つ渡の音も
 静かに○見わたす限りの春の海、白帆も島も霞みつゝ○蓬窓に結ぶ
 故里の夢も穩かに○旅から旅のさすらひに○語らふ友もなき天涯○

面白う聞く鶯の聲○落花を見ては悲しき心起り○落花の雨に故園の
 春を懐ひ○しどくと降る春宵に、人を懐ふの夢も醒めがちに○時
 鳥の一聲に夢破られ○月は淡う残りて夢にも似たりな○星の花消ぬ
 ゆく空○山館の宿りに杜宇を聞く○花の老ゆるを見て、身の老いゆ
 くも憐れど感せられ○一家離散して處定かならず○身は萍の處さ
 だめぬ悲しさ○天涯に春を送る、そも幾度ぞ○思ひし事は皆水泡に
 歸し○世は何事も儘ならぬ慣ひ○身に恙なきぞ仕合なれ○希望多き
 初夏の天地○夏の初めの心地よく、身は客となるも打忘られ○脱ぎ
 捨てし春衣さすがに名残をしくぞ思ふ○思ひを之にて通はす西東○
 花にとむさで歸る雁戀しく○霞がくれに歸る雁金○鳴きすてたりし

不如歸の一聲ひさし○またも秋風あきかぜ邊に吹さそめ○千里の遊子いりし秋に感かんじ易やすく○一片の梧葉こけふに秋を知り○轉征衣うつせいいの薄うすさを歎なげす○尙江城なほこうじやうに滯とどる○援衣えんいの節せつに人未だ歸り得ぬぞ口惜くちやくし○秋風寒あきかぜみ旅衣たびい○擣衣きねたの響ひびさ遠とほ近こにしげし○朝顔あさがおの日日ひびに花小ちさう咲さき出でるを見るも○哀あはれ芭蕉ばせうも寸すんすに破やれ、そゞ雨音あまねたかし○旅窓りよそうの燈火とも影かげ暗くら○秋雨あきさめの旅舎たびやにして故郷こきやうを偲しのび○故郷こきやうよりの音ねづれいと喜よろこばしく○池いけの蓮葉はすはは風に破やられ、今は雨あめをさへ遮さへりがたし○江城こじやうを度わたる雁かりの影かげ淋しみしく○月に打うちつ礎いしの畔ほと○幾度いくたか枕まくらを敲たたてつゝ、遙はるかに響ひびく鐘かねを數かずふ○秋あきは一入ひとしほ遊子いりしの鴈かりを斷たたしむ○夜よふけては心こゝろいよ澄すみ、緑くれと盡つきせぬ思出おもひの絲いと○誰たれどか吾わがが思おもひを語かたるべき○孤燈ことうに伴ともふ吾わがが影かげのいと瘦や

せて見ゆるも、哀あはれにも又耻はづかし○雨あめかど疑うたへば月明あきかかにして落葉おちばしげし○鹿しかの鳴なく音ねもいと哀あはれ○旅寢りよねの枕まくらに伴ともひし蟲むしの聲こゑ、今いまや枯かれくくになりゆき○絶たねねくくに鳴なく蟋蟀せりくす○旅屋たびやの衾ふすま秋寒あきかぜみ○親おやをおもひ友ともを慕したふの念ねんいや増まし○群むれをはぐれし孤雁こがんの鳴なき過すぐる○絶たねねて便たよりだになし○いとゞ君慕きみしたはしう○細こま々々しく認しためて寄よせん文字もじも、半なは涙なみだにしめりゆき○深山みやまに行ゆきくれたる心こゝろ淋しみしさ○落葉おちば分け行く秋あきの深山路みやまぢ○紅葉もみぢのにしきも散ちりては溪川たにがはのあくたと撰はらばす○釣瓶つるべ落おしてふ秋あきの日ひ○暮くれ行く秋あきの淋しみしさ、況まして旅たびなる身みは○心こゝろ細こくも山路やまぢを迎むかひつゝ○塙はらに急いそぐ鴉からすを見ても羨うらやましく○蕎麥そばの花はな白しろう夜路よぢを照てし○行手ゆくてに閃ひらめく燈火ともの一つ○燈火ともをたよりて行く心こゝろ細こさ○知しらぬ

旅路の夜に入りては○父母は如何に、友は如何にと、さまざまの物
 思ひ○ひとり小さき胸を痛め○せめてもの慰めと詩に思ひを遣り○
 心は千里を隔てぬと哀れ身は西東○驛使の音づる、毎に、君よりの
 書信もやど○一片の郵箋に萬縷の情緒を寫し○いつも床しる水莖の
 跡○行くささ其の景色、何くれとなら○繪に詩に見事に書さなされ
 ○其日くの日記の節々○旅の事ども文にもものし○故山の景色眼の
 あたりに見るおもひ○萩の下露硯に承けつゝ、認めし此の詩○菊の
 香たかき旅窓にて、かくなん○今夜の月に對ひて、追懐のまゝを記
 して君に○盡さぬ思ひは旅館の燈火に預けぬ○思ふ千が一にも足ら
 ず○餘は千里を照す月に問ひ給へかし。

○樓閣
 神祠
 寺院

高く雲表に聳ぬ○高閣巍然として天を衝く○閣の三面は皆欄干○水
 は樓を繞りて流れ○十二層の樓は海に臨んで築かれ○遠近の勝を眼
 中に收め得べし○閣は小丘に倚りて築されれば尚しも高う○規模頗
 る廣大○三年を経て成る○構造堅牢なり○尤り壯麗華宏○上は霄漢
 に接するの狀○危樓傑閣山崖に沿うて建てられ○昔日の觀なしと雖
 も○築造奇巧を極め華麗を尽し○東西の樓に通ずるには飛廊を以て
 す○實に千年以上の建造物と知るべし○山を負ひ水に臨み○地は最
 も形勝を占め、加ふるに殿堂の美麗と以てす○塗るに朱を以てす○

○ろりかく

門に入れば池あり多く蓮を植う○地域廣大○水心に小亭を設けて休息の所とす○幾多の亭榭あり○丘あれば必ず亭あり、水あれば必ず舟あり○近年土木の業大に發達し○樓は高く白雲に入りて月を捫すべし○倚すれば全都脚下に落つ○近國の連峰は指顧の中に在り○壁上には古名畫を掛く○殿堂の莊嚴なる近國に比なし○祠宇宏壯にして古雅、人をして敬虔の心を起さしむ○殿堂清楚○棟宇雲に入り○修廊曲欄○小池には石橋を架す○金碧燦然○本殿に達するには百卅餘級の石階を攀づく○飛簷崖に臨んで危し○欄によりて臨めば、深さ數十仞の溪谷にして白雲たちこめたり○堂を繞すに勾欄を以てす○境内清楚○無數の石燈籠○千年の古木堂宇を蔽ひ○門扉の細に

至るまで精巧の美をつくす○檐楹高うして飛ばんと欲す○高閣樹梢に抽さんづ○山の一角に危樓を認む○題して某閣といひ、某の筆なり○竹泉の微に至るまで備らざるなし○亭臺の美、園林の勝、両ながら併せ兼ねぬ○古來の名刹にして寺樓の觀尙依然たり○庭の竹石古色深く、風趣掬すべきものあり○塔あり高さ五十尺ばかり○塔尖林表に見はる○塔尖を雲表に望むを得○夕日は斜に危塔に掛りて○寺は城を距ること里許○石徑を登ること百歩ばかり○樓閣高低して溪谷に連なり○閣は崖により、欄は溪に枕む○溪水を引いて浴槽に注ぐ○自然に壁をなすの岩○窟中に明王を祀る○寺は山頂に在り、白雲常に相護す○寺門に達するの間、左右修竹、而も石徑にして苔深

し○寺域廣濶にして樹木多し○岩石の奇なる、樹木の淋びたる、殿堂の清楚たる○堂後に瀑布あり、三伏の熱を洗ふべし○寺は櫻花によりて名世に高し○松柏天を蔽うて晝も尙暗し○僧の勝を説く皆佛に因むものゝみなり○磐石に薬師の像を刻む○幾千年の風雨にさらされ○香煙長しへに絶わす○舊藩公の菩提寺にして○寺記を案ずるに○碑ありて其事を記す○諸を舊誌に考ふるに、更に徴するに足るべきものなし○碑の長二丈濶五尺許○字多くは苔に蝕せられて讀み難し○摸索して讀むも能はず○字體遒古○變遷の事どもを記して遺すなし○蓋し民徳として之を祀れるなり○襄人常に絶ゆることなし○疎鐘に促されて歸途に就さぬ○晚鐘に送られて歸る。

作例

○激江のはどり
 六節 山本彩虹

○ゆく春の夕なりさ。

暫し故郷の山水に接し、永遠に老いざる國府河畔自然の色に、すまみたる吾が心を静め、且は樂しかりし昔の夢に入らばやど、一管の銀笛に逍遙の曲吹きこめつゝ、そこはかどなく徜徉ひ出でぬ。

○こゝ懐しき激江のはどり、幻時の夢を繰返しつゝ、遅々として歩を移せば、やがて淀水が淵の岸に出でたり。静かに堤上の芳草を折り籍さす、幼馴染の風景に對へば、嬉しさが如く、悲しさが如き、

○作例

感想の潮は胸底ふかく流れて、恰も昔の戀人に會ひたるが如き思ひをなしぬ。げにや、故郷の自然こそ、わが唯一の情人なりけれ。

○わ、風すさび雨そくぐこと、幾い歳ぞ、ひとり國府河畔不斷に眠く實在の響韻に耳朶を傾けて、悟入の境にさまよへる石佛を見ては日頃眞理に憧れ、人生の慰安を渴望せる吾は、崇高一味そぐろ肌に迫るを覺ぬぬ。

かくて石佛の顔相を傷けたる當年の腕白兒は、いまやそが膝下に敬虔の思ひを捧げんとはすなり。

○ふと吾は深き瞑想より覺めぬ。

今しも年若き詩人の胸に躍らん血汐の如き夕陽は、そが麗しく鮮

やかなる金矢銀箭をもて、天地を焼き尽さんどす、かくて静かにいざよひたる夕日はやがて、そそりて天に聳ゆる石槌山の彼方に落ちゆきて、眞紅に燃ゆる夕雲は、さながら祭壇の前に捨てられたる血染の旗の如く、縷々として棚引きたる彩雲は、天つ女が帯にも似たらんかし。

亡き人の靈が落ち行く西の空、そは淨樂境とぞ云ふなる。げに華やかなる夕焼雲の彼方にやあらん。今しも靈光まばゆく、妙香薫する酒宴の庭に、亡き靈あつまりて、天文の徳を讃ふる最中なるらし。かかる夕、暮雲を仰ぐ毎に吾が胸は、一種敬虔の思ひに充ちて、静かに耳を傾くれば、奇しくも妙なる天の樂聲こそ、いとも微かに聞

ゆなる。

○名も知らぬ妙なる色彩の時々刻々に移りゆく、夕暮の空こそげに
ミニエーゾの神が色ど云ふ色の極美を尽して、彩りたる活畫なりけれ
富嶽の靈色に逡巡したる一畫工に非ずとも、誰か此の靈活なる夕景
を寫し得べき。

折しも吹き來る夕風は、例へば天秘の扉と漏れくる神の息吹にも似
通ひて、吾が頬に接吻しはては堤の草に何事をか呷く。

○それより後、吾はしばく此處國府河畔の堤上を徜徉ひ、雲を愛
したる西歐の詩人が昔を思ひ出で、は、そが靈の雲となりて、夕暮
毎にさまよひ出づらん心地するに、限りもあらぬ白き想像の翅を遠

く夕雲のはどりに馳せたりき。

○送る柩

泉 紫房

噫、芳子は遂にはかなくなりぬ。

優しき唇より洩るゝ唱歌の聲に聞えずなりぬ。

鐘の音しげき夕、可憐なる芳子の柩は荒れはてたる枯野を辿るなり

き、花環をさげて送る吾の小さき胸は狂ひて乱れぬ、乱れて纏れぬ

天使に似し芳子は、淋しき丘の麓の新墓の主と化しぬ、靈よ、み靈
よ、何地の空を彷徨へる。

夜なく姉を戀うて呼ぶ聲は、果して秋草しげる、かたみの窓に、

○作例

聞ゆべきか。

〇月 宵

(一)

縹緲たる蒼穹にかかると大なるみ光りの玉！如何に幽玄崇美なる。缺けて或は線となり、弦月となる。満ちて或は半球となり、完璧と化す。怪しく、くしく感ずるは月なり、此の怪しく奇しき月！我が飄零無聊に悶ゆる夢を幾度か慰めけん。我が落膽失望の淵に沈む胸を幾度か癒したりけん。哀れ懐しの月よ、四時に姿をかへて罪の人の世を照すに非ずや。

(二)

春は朦朧の姿。

千里鶯鳴さ春深き頃、やさしき佐保姫の裳裾に低う棚引ける霞の奥より、仄かに漏るゝ月影はいかにも幽艶なる雅美にあらすや。「春は花」とやら云へらんも、是れ光輝赫然あかるき晝を云ひたるものにして、光り失せたる烏羽玉の暗き夜は、月を賞せずして何ぞや。花は清香の一部を齎すのみ。垂れこめたる霞の奥をどほして、漏るる朧げの月影ありて、春宵一刻値千金を致せり。あはれ値ある春の夜の月。

(三)

〇作例

夏は清涼の影。

雷雨一驟、乾坤暗黒あやめも分かずなる夏の夕ぐれ、豪雨沛然、忽ちやんで空ささりげなく澄みわたれるとき、中天に懸る嫦娥の！姿如何に清涼を覺ゆる？葉末に結ぶ露に宿る夏の夜の月、眞珠の光りのそれにも似たり。あはれ、涼しきは夏の嫦娥の姿。

(四)

秋は皎々の光。

月と云へば秋、秋と云へば月を聯想する程の秋月は深き關係あり。それその光りの皎々として盡さざるにあり。古今東西幾多の詩人が此月に涙を灑ぎたる。配所の道眞、行脚の西行が名吟も此月を見て

出でたるにわらずや、皓々無垢なる月の光りを見守れば、兎わらはれ、蟾蜍跳り、オリンピツクゲームの名譽の榮冠宿り翠の妻の姪戯る。あはれ眺多き秋の夜の月。

(五)

冬は悽愴の輝き。

霜枯の枯木の姿淋しき冬の夜、朔風凜々、寂寞たる寒天の將に凝らんとするとき、天の一方に一輪の寒月莞爾とわらはれたるを見て、如何なる悽愴を感ずる？一種云ふべからざるインスピレーションを來すなり。悽然愴絶、或は遠人をしのび薄命をいたみ、恍として千條の神來一時に集る。あはれすまじき神力魔力を有する冬の月

○作例

(六)

朦朧、清涼、皎々、悽愴と化する月！悠久なり無限なり。千古朽
 ちず、萬代變らず。東洋に於て西洋に於て只一箇のしまぼしなり。
 荒城を守るもこれ、墳墓を守るもこれ、山河を照すもこれ宮殿を
 照すもこれ、吾が情の闇路にさ迷へる胸の懊惱を照すもこれ。哀れ
 慕しき千古一穗の青燈！いまし出で、吾を救ふ幾何ぞや。

○藻の花かけ 岡田白羊

三更の星の光り涼しう、地に落ちては狭霧と交らひ、櫓の木蔭うる
 さげに、二十日方の月待ち顔なり。

更け行く夜の餘りに早くて、苦船の底しんめりど、たぬすく船縁に
 囁く波の音の、水棹もて緩やかに玉藻を乱して行くことに、いとゞ
 更け行く心地して、船の進みも遅う、行く春の夜の風をぐる寒くし
 て思へば春の夢遙けき心地に、二十日方の月待つと、獨り春の恨も
 長う、解けぬ思ひを船に乗すれば、水は緩うして常久に流るゝぞや
 ふと風記りぬ。花の香そよ〜と、東雲少しゆらめくけはひ、いづ
 こぞひ、が耳か。

細き唄はのかに流れて、思へば風の若葉をくぐる聲か、水の水珊瑚落
 つる音か、花の香につれてゆるやかに、たとへば、苔小さき薄紅小
 草の、玉藻の露どまがふべき細雨に、希望勇ましくひもとけて、限

○作例

りなく青天を見上げたる如くに艶やなりさ。

風は全く落ちたれど、東雲やにはの白く、梅のわくら葉けざやかに、月はやうくにはのめき出でぬ。銀盤の如し。月の光り征矢、深緑の艶なるに、徒に流れ来れば、木の下わかるく、水清らに、藤の花の烟れる姿やさしう、狭霧も流れこみて、藻の花をろくど淀みを作る。

君に見よどのほ、笑みの

眼にふさはしの山吹が

春のわか葉の艶やにて

とど頬づれば口紅の

薄きにゆらぐ花びらや

聲は艶にくもりぬ。月はいよ高く、櫓の木末はるくど、萬衆は香を吹いて、おならぬ囁きさやくど、風も起りぬ。水棹取勝手は、いつしか撓みつ。口紅の薄きにゆらぐ花辨やど、繰返し〜耳傾くれども、唯水はゆるら淀みゆくばかり。もしそれ月光ゆらくど、木の間を辿りて、頬ゆがめけん玉の露に觸れし時よ、はぢらはしう口つぐみて、俄かに深き思ひに沈みしかさらずば、遙かに消ゆゆく天軍のうねり眺めて、清新の光り吸ひにしか。彼處にもやがて扁舟の子、舟ゆるやかに、水棹やはらかに、藻の花狭霧につままれて、舟めぐららし。

○作例

舟進めんとすれば、玉藻はろくど水棹にからみつきて、水淺く清らに、うるさげなる新緑の影もやど狭霧ゆき交ひて、月光いと緩やかなり。仰げば、西へくと、ぬり行く天軍の姿いよ、かすかに。むすばはれたる月姫さへ、面ふせがらのけはひや。まだ五更にも道ければ傾かじよな。有明の頭をやさ唄たづぬるはもの憂しや。藻の花に包まれて舟は行かずなりぬ。月も淨らかに萬衆を照して懶げに、歩み遅きに似たり。藻の花かげは水晶の水、月光水面に徹して輝々たり。川の隈をうかがへば、木立繁く、藤の花か煙れる姿やさしう、流みをつくるどてろ、卵の花か白し。

○故郷

野口楓葉

ひま行く駒の足にまかせて、吾が故郷をわどに、旅の月を眺めてよ
り、はや十歳餘りにぞなりにける。

思へばいにし昔の今宵なりけり、明日は雲とも霞とも、名さへも得
知らぬ旅路の夢を見るなりければとて、親しき友の三人四たりして
燈火の光りさへ沈みて長き別れを憂ひ顔なる中に、小夜更けてあた
り淋しく空のいと清らかに澄みて、星の一つ二つ、降らんばかりな
るを眺めて、盡さぬ名残を惜みたりける程に、夜もいたく更けて、
はや曉にも近からんとて、友は己が家路さして、歸り去りければ

吾も、ふしをとりたりけるが、明日は住み馴れし、故里をすて、はなれ遠き旅のあたりに遊ぶことなれば、枕に就くも、いかでか眠らるべき、やがて、鶏の聲近く聞えて、東の空に曉の色現れれば、急ぎ旅支度して、やがて、父母、さてはあたりの誰彼に別を告げて、まだ消ぬ残る、星の光りを浴びて、振り返りくはては己が心を叱り懲して、やうく町の端となる。松林のほとり迄来りけるほどに、友なる人の送らんとて、曉の風に衣の袖はらはせて、待ちたりけるが、やがて、我影の近くなりけるまゝに、共に笑みを分けて、友よさらば、あはれ、何事の悲しければとて、鬚毛の先に貫かれたる、一車、手の上に着るは、熱き露の白玉なりけり。

あはれ、いつまでも、斯くあらんよ、盡きぬ名残は如何にせん、いざさらばと、東と西に分れ行きけるが、後ふり返りく、はては、眼を閉ぢて、ひた走りに走りて、狭霧の中に、やがて埋もれ終りぬ思へば夢なりけり、うつらくと何事も忘れける程に、庭の櫻花、散りて咲くこと此に十度。

あはれ、友なる人は都のあたり出で、學びの道歸むもあらん、或は、業成りて、いみじく氣高うなりたるもあらん、されど口惜しや吾は都のあたりに行くことさへなすと、片山里の邊りにまづしう、住みける、思へば冴ぬたる月を見んこと、なまじひに、古し事をも思ひ出で、千々に碎くる胸の内、涙の時雨やがて降りて、草間に

すだく蟲の聲をへ、いと悲しうは覺ゆれ、あなものはれ。

○山上の夕と河上の夕

新聞記者

山上につきしは午後五時頃にやありけん。雨は止みたれども空は尙曇れり。白き雲黒き雲頭上にかさなりて山は寂然たり。

森々たる杉の木立、天を衝くばかり高く聳むたるが、梢のいろ立木の姿、神々しうかみ淋びて、冷かなる秋の風音もせで、襟足寒う吹き来る。

森深きところ、そこに社あり、葛木神社と云ふ、葛木明神を祭れるなり。

形ばかりなる拜殿、草の扉萱が柱、苔青うもの古りて幽寂の氣、もの凄さまで森をかほひたり。

石磴數階草鞋ふみしめて社前に額づけば、慷慨胸をるぐるが如く、滾々とわき出でつ。

それよ、昔元弘の亂に、主上は畏くも天下には隱家もなしと、御なげき遊ばされ、松の下露、御衣の袖に拂ひもあへず、しばし雨風凌ぐ笠置の山に御幸ありて、諸國の武士を召し給ふ。

南殿の御夢、まづ菊花流水の跡を追うて、此に立ちし忠烈無比の楠廷尉正成公。處はいづくぞ、あゝこの金剛山。

劍戟幾たびか神風に磨して、奸賊の死屍數萬は山靈に供せられたり

斯くて、忠義に凝りし鐵石心ど、金剛不壞の山跡とは五百年の苔を
つんで、こゝに畿内大平原に儼として立てり、海を抜くこと實に四
千五十尺。

斯くの如くにして、吾が瞑想幽思限りなく、涙か露か青苔を露しつ
つ、山上の暮靄はいよゝ深く山は更に寂たり。

渡船は未だ來らず。

吾は流水を眺めて、獨り紀川の岸に立てるなりき。

紀の群山、起伏して紫に色どられたる山の姿、おもしろう流れに
映じて、水は絶えず流れゆく。

やがて、渡船のかげは欸乃の聲と共に、蘆洲の彼方に見れたり。選
しき船頭、銅色の腕を伸して巧みに、船は岸邊に達しぬ。
旅客は悉く船より上りぬ。

空になりし船に吾等は乗り込みぬ。

やがて、船はゆらくと動きをめて、一波一波に波は船端を叩き、
時に急流、時に緩流。

見上ぐれば、夕日の影彼の山の端に消えて、茜さす夕映の色、眞紅
淡紅に燃わたり。

青蘆しげき所、唧々の聲をもらす何の蟲ぞ。夕べの露は川岸深うと
さして秋風冷かに、西行ならぬ身も尙、歌はしやと思ふばかりなり

あはれ悲しき秋の夕ぐれ。吾は言ひ知らぬ感想にうたれて、船中に立ちくらしつ。

小波は、たぬす船ばたを洗へり。されど此度の波はささの波にあらず、ささの波は此度の波にあらず。かくて水は萬古に流れゆくなりけり。

○旅立 向井井蛙

「月日は百代の過客にして、行交ふ年もまた旅人なり云云」とは、芭蕉が奥の細道の冒頭なり。げにや人も旅世も旅、五十年の人世は蓋し辛苦の旅にして、三日四日の草枕、そは合間／＼の慰籍なり。

食を負ひ糧を荷ひて、名も知らぬ出ふところ、木かげ岩角にわびしき夢結びつ、白河の關に秋風の訪れては、都の空の春霞、たちけん折の思ひ起されて、旅は幸きものと思ひけん昔は知らず、開け行く今の世に、生れ出でしを永久の住家にて、慣れたる山なれたる水に日を送るも、口惜しきことならずや。

世はいつしかに肌寒う秋風の吹きて、龍田姫が妙なるみ手に、織成せる峰の錦、晃山の紅葉の色は、今を盛りと聞くものを、いざや一度は彼處に詣で、幸の湖畔にさかしき夢結ば、やど、親しき友とつれ立ちて、いよ、旅立の身どはなりぬ。

墨染の法衣一片、月漏り星窺ふ草庵に、蜘蛛の巣はらひもやらぬ芭

○旅立

蕉にも、松島行に會良と云ふ友ありき、伊勢物語に「昔し男」と呼ばれて、歌名一代に高かりし業平も、孤影友なき旅の身をかへりみては、隅田河畔の都鳥に、そゞろ人戀しどて、吾が思ふ人のありやなしやを問ひぬ。げに旅は道づれ！

さても此度の旅の、心知り合ひし友どちの、共に吟じ共に歌ひ、黒髮山の奥深う、共に神秘に浴さばやと云ふに、そゞろ心も勇み立ちて、六根清淨の白布に、同行二人と筆染めて、旅から旅の三度笠に銘うついとまもなく着のみ着のまゝ、綿衣一領、草鞋脚絆を僅かに旅のしるしにて、人は今宵、月見園子に、夢も圓かなる十三夜の夜半を、獨り飄然として立ち出でつ。月白う照したる、友がどぼそを

叩きぬ。

今は昔、うらぶれの胸を抱きて、月白さ十六夜を、住み馴れし都の空さ迷ひ出でつ。とりが鳴く東の里の旅衣、行く先くの歌枕、目にふれ心に映じては、胸の思ひを詩にやりて、十六夜日記と呼ばれては、知られぬくまもなきを、あゝ吾れ、今この明月に對して立つなどか詩なからん、などか文なからん。あゝされど、口惜しき哉、吾が胸に詩の影なく、吾が唇に詩韻あらで、只偉大なる自然の美にまかれて、茫然として自失するのみ。

頼て友も出で来ぬ、吾も人も、共に旅立の第一歩を踏みぬ。燃ゆるばかりの紅をめぐらして、漫々みなぎれる紺碧の面を、やと

しき小舟の行交ふさま、あゝ如何に平和なるらん、玉を鎔したらん
 如しと聞く大谷川の、そも何に怒りてぞ、轟々の音すさまじき華嚴
 の灘、あゝ如何に剛壯なるらん。善つくし美つくせるてふ日光廟の
 いかにも吾が目そくらしやせん。

吾は小時、空想の子となりて、聯想はますます、聯想を呼び來りて、
 はては過ぎし年、碓氷に紅葉探りけん事なと思ひうかべつ、只行先
 の面白くをかしく、言葉もあらで幾町をか歩みぬ。

顧みれば後の月、黙しに黙したる城山の一角にかゝり、吾が啓行を
 送るにも似たり。

○村小路

野中香水

緑吹く風は静かに、野を渡る朝な夕な涼しさや。行く水の流れゆ
 るけき里川に、雲も平穩に影を落して野は今、早稲水に動きて、夕
 どなれば雨を呼ぶ蛙の聲のひびき渡りて！。野の彼方、桑摘む里に
 日は落ちて、緋の襪、白手拭の乙女は軽き足どるなりき、微かに唄
 うは、何の調べや、聲は涼しく緑に消えて！。

關の色静かに緩く野を染めぬ。燦爛と日影に映えし水の面低くかす
 みて、小波消ぬぬ。

星の色、月の眉緑に映えて、世は清新なる。夕日いざよふ野の彼方

亂れ迷ひし怪しの雲も、旗かくして清き風がもてくる闇の色。

胸は、日照らぬ北國の氷の海と鎖されし、弱き身體も洗はれて、詩にかつゝを叫ぶらし。新しき緑の孕まれし、おぼる月夜の扉に立てば、ゆるき胸血も又ときめくを覺ゆるるれ。

月は今一望十里の水村を照して、夜は静謐なり。見よ大いなる身然の影は、深き默思の譜を唄きて、高さ尊き教刻を胸に刻むらし。

野の水は微かに、ゆるく唄をつづけて、魂迷ひ行く夜の精を、水面をうけて、流れゆくらし、草の影水に映りて尊けれ。

夜は早やいとど更けぬらし、村の青葉に灯は、消えて散在する里の白壁うすく光つて、力なし。稻の葉をゆすりて聞えし蛙の唄も、今

はいつしか眠むたげに、星もうるみて、夜は更けぬ。

鈍色の月の光りは、遠山の梢に落ちて、杜鵑鳴く村を斜に見渡せば渡る夜風をつめたくも、胸に沁み入り深き自然の背景に、立てる吾が身の今更に、つきぬ悲哀に涙もやせし頬をすべりて！

月沈む夜の水の村、人も睡りぬ。里も眠りぬ。精氣はく、綠情も夢と眠りぬ。世に彼方さす霧は、低くも動きそめて、朦朧なる夜の姿は又いみじくも莊嚴なれ、誰が家の主か捨てたる野の犬の、沈黙の顔に低うらそぶく遠吠ゆるや。聲われど、聲なきそれより尙一層に、寂寥を胸に刻むも哀れ深し。

あゝ吾や、清き涼しき野をゆかしみの性質なれど、あゝ吾や、静謐

勝る野を想ふ、孤獨を喜ぶ子なれども、この朦朧夜に、野犬の遠き
遠吠を耳にうつせば、夜の扉に立たんも餘りわびしくて、離別の
詩かをへしつゝ、緩き足にて、野をさがり行く。星の色いとも微かに
水に動きて、風も死したる村の小路を、闇に辿りぬ重き足して！

○ 薫 野中忠作

○ 燦爛たる金佛の前に額垂れて、いみじく匂ふ焼香の薫りをかきしど
き、胸底の塵埃全く拂はれて、吾は漸く佛に近からんとするを覺ぬ
ぬ。煙ますく嵩じて、やがて其の拜殿の梁にさまよひ行かしどき

ふと仰向けに瞳をこらせば、こは如何に金衣燦たる聖の影、煙を分
けて顯はるゝを見たり。さても、そは夢か幻か、あはれ奇しさも
のは、焼香の薫りならずや。

○ 薔薇姫百合の香に酔ひ園に眠りて、静けき夢を結びたる小蚊は、今
朝花守の目に觸れて、あへなき最後を遂げぬ。花は優しさ露を其の
亡骸にそそぎぬ、いかばかり情に満てる手向の薫り、其の中に潜み
たりけん、あはれ蚊は、薫りのために死し薫りのために祭らるゝ。

○ 吾れかつて胸に悶ゆる炎を秘めて、明方ふるさ林のはどりを迷ひ

ぬ。古の藝術の匂ひをこめたるあらゝぎに、微かに輝く曙光のさても美しく、恍惚として佇みしに、ふりし藝術の薫りは愈高く薫じて遂に吾は、昏眠の巷に落ちんとす、折ふし翅いと輕げに、瑠璃の大空翔け行きて白鶴如何に覺ゆけん、靜かに眠る塔の一角に下りぬ。さても、力あるものは薫りならずや。

枯草の匂ひを讀へてやまぬものは、西國の詩人なりとかや。さはれ吾は、綠色濃き楠葉の匂ひをこよのう、趣あるものとす。赫灼たる熱日に照されて、青く薫れる其の葉影、隱水のはどり搖籃を用して、靜かに桃源の夢に入れば、氣高き匂ひ胸にしみ入り覺めて後尙

吾をして、此世の人ならじと想はしむるも、なつかしの極みならずや。

蕭條として萬物等しく眠れるの時、白葩三四輪梢に咲き、戀の黃鳥花冠に舞ふ。誰か其の神韻躍如として、胸に逼る花の薫りを愛せざらん。この白き葩、この清き薫り、やがては吾が心の法とせざるべからず。

若草の萌ゆる春の野、青葉しげれる森影、さては眸はるけき海原に瀟々の雨音消ゆき、夕陽わかれて、低く高く、或は圓く、平たき

ぬ。古の藝術の匂ひをこめたるあらゝぎに、微かに輝く曙光のさても美しく、恍惚として佇みしに、ふりし藝術の薫りは愈高く薫じて遂に吾は、昏眠の巷に落ちんとす、折ふし翹いと輕げに、瑠璃の大空翔け行きて白鶴如何に覺ゆけん、靜かに眠る塔の一角に下りぬ。さても、力あるものは薫りならずや。

枯草の匂ひを讀へてやまぬものは、西國の詩人なりとかや。さばれ吾は、綠色濃き楠葉の匂ひをこよのう、趣あるものとす。赫灼たる熱日に照されて、青く薫れる其の葉影、隱水のはどり搖籃を用して、靜かに桃源の夢に入れば、氣高き匂ひ胸にしみ入り覺めて後尙

吾をして、此世の人ならじと想はしむるも、なつかしの極みならずや。

蕭條として萬物等しく眠れるの時、白葩三四輪梢に咲き、戀の黃鳥花冠に舞ふ。誰か其の神韻躍如として、胸に逼る花の薫りを愛せざらん。この白さ葩、この清き薫り、やがては吾が心の法とせざるべからず。

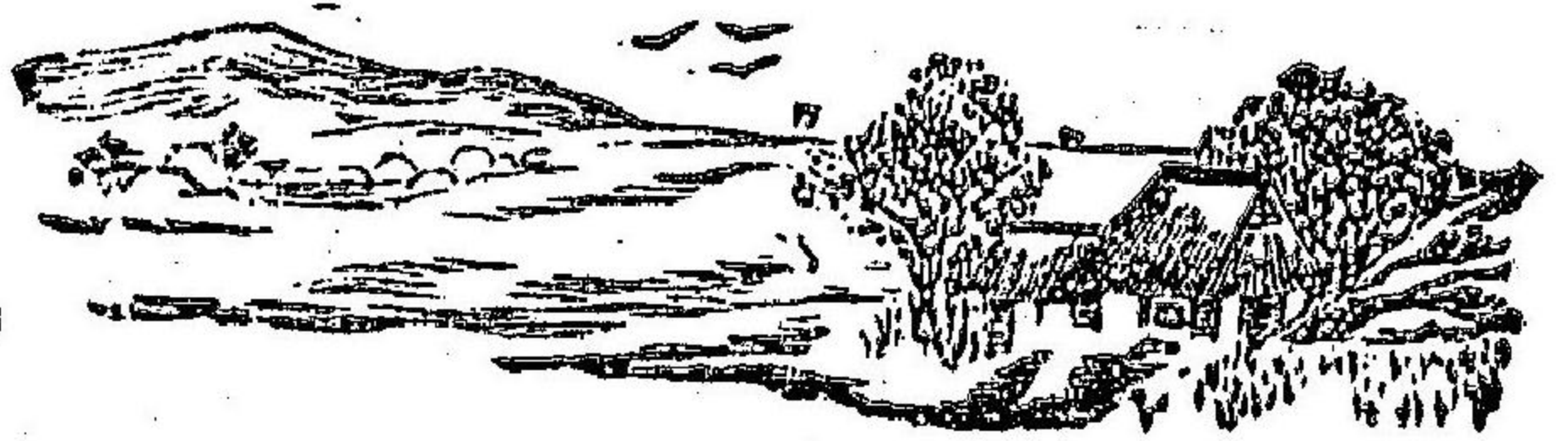
若草の萌ゆる春の野、青葉しげれる森影、さては眸はるけき海原に瀟々の雨音消ゆき、夕陽わかれて、低く高く、或は圓く、平たき

山を跨りて、美しき彩虹の蒼穹を飾れるとき、そこに人の世の塵の
烟の影絶えて、求むべからざるサブライムなる匂ひの、その中にみ
なされるを甘受せん。これは尋き雨の神が下界の遊ぶを、誠むるの香
ならずや。

九十の春光花に納めて、ほこり出でし爛漫たる櫻花、遅々たる春日
の曙光を浴びて、麗氣徐に薫する所、そこに、清麗潔白、崇高優
美のかそり流れて、我が大和民族の心は、常に之がために蔽はれ、
武勇の花、愛國の實となり以て我が國粹を形づくるあゝ優しくして
健氣なるは、櫻花の匂ひならずや。

春光融々、陽氣斯界をどざせるの時、長汀曲浦、白砂青松のほとり
を洗ふ白浪の、香ひはさながら白絹の薫するが如く、島山巖巖とし
て、繪帛に包まれたらんが様なる海の色、そは永劫にやはらぎの香
を齎して、吾等に争鬪悲惨の影を認めざらしむ。
さあれ、此等の外に、吾等の胸底には常に、大なる希望、大なる理
想、大なる向上、大なる主義の薫するあり。吾は之を最も愛し最も
尊ぶものなり。

美文精金 終



明治四十一年一月十五日印刷
明治四十一年二月二十日發行

定價金四拾五錢

著者 小宮庫治

大阪東區南久太郎町四丁目卅五番屋敷

發行者 田村九兵衛

大阪市西區梅本町三百五十六番屋敷

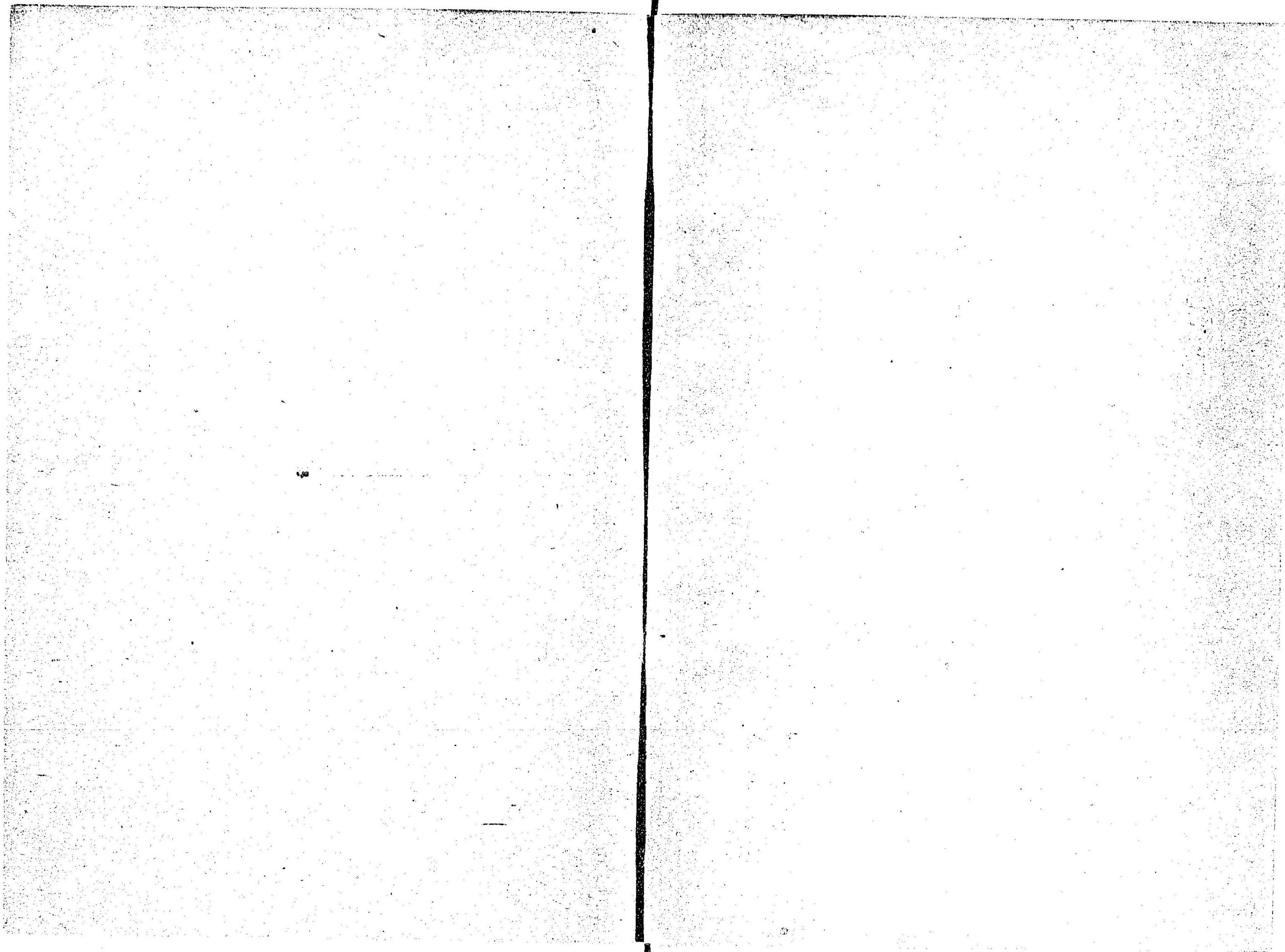
印刷者 齋藤丈輔

大阪市中心齋橋通南久太郎町北へ入

發行所

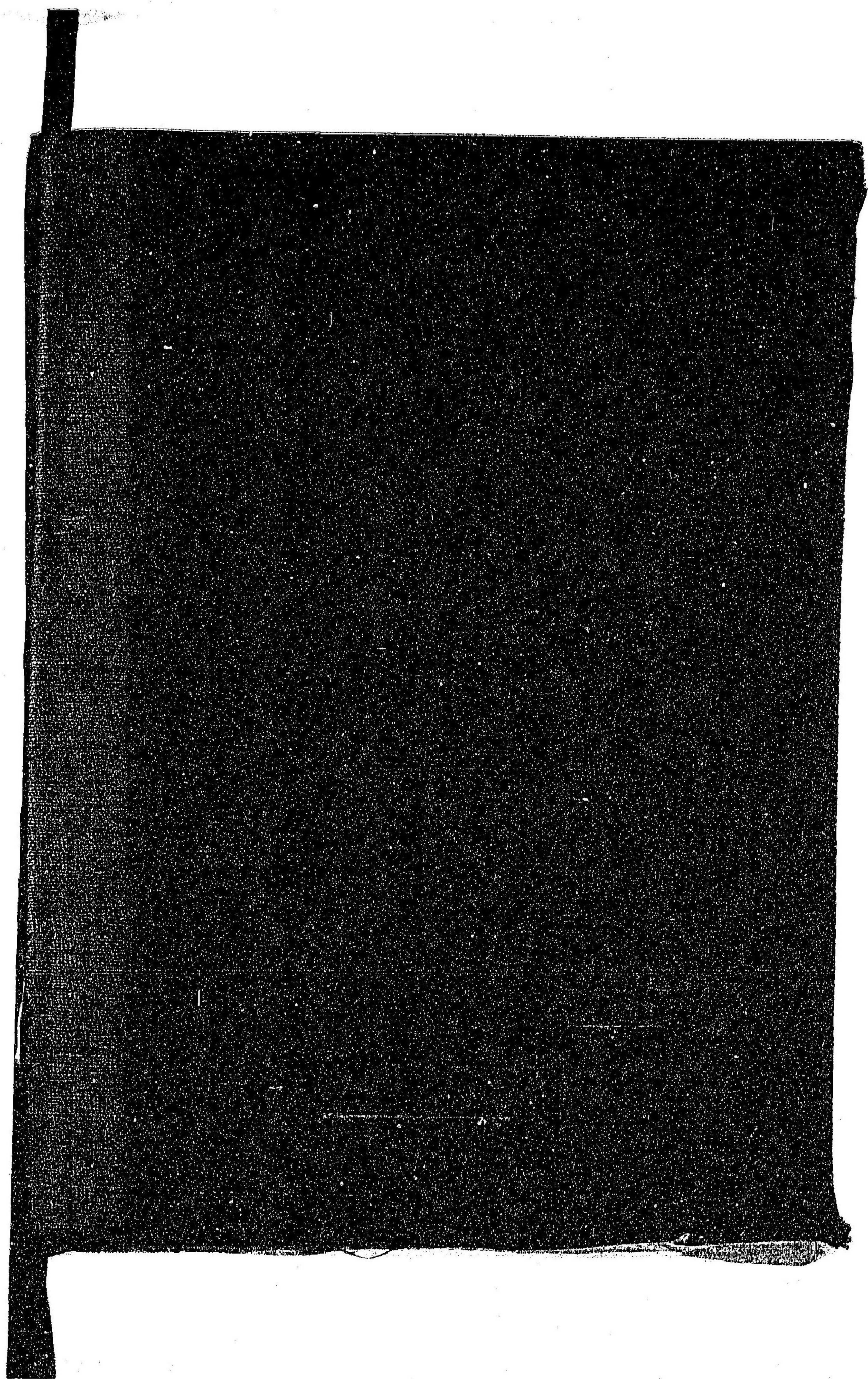
田村熙春堂

不許
複製



223

854



079454-000-5

特62-434

美文精金

小宮 水心/編

M41.1

DAC-3448





